慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	プラトン寫本の傳承について
Sub Title	
Author	粟野, 頼之祐(Awano, Rainosuke)
Publisher	三田史学会
Publication year	1941
Jtitle	史学 Vol.20, No.1 (1941. 7) ,p.1- 69
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	口繪:アレクサンドリア「ムウサイ學園プラトン哲學者ディオニュソドォロス」の碑文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19410700-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

アレクサンドリア「ムウサイ學園プラトン哲學者ディオニュソドオロス」の碑文

碑文年代。西紀二—三世紀頃。埃及古代アンティノエ市（ポリス）の廢墟より發掘せる大理石面に刻まれたる文字。

寫眞は本碑文の發掘者 J. De. M. Johnson 博士の厚意により筆者へ贈られたもの。（本文參照）

プラトン寫本の傳承について

粟野賴之祐

目次

一、序及び文獻
二、アレクサンドリア圖書館とプラトン研究
三、プラトン作品の四篇群分類について
四、現存するプラトン寫本について
五、プラトン草紙文書並びにプラトン作品の諸譯本
六、結

一、序

われわれ人類のうち、最も偉大な哲學者プラトン（西紀前四二八/七―三四八/七）の全作品が、二千四百年近くも散佚することなく、當時に於ける何人の作品よりも、比較的完全な面影を傳承してゐることは、そ

れ自體一つの欣ばしい奇蹟であるが、更に、その傳承の歷史を見ることは文化史研究の上から、極めて重要な課題であらうかと思ふ。勿論、この問題はプラトン哲學研究の側から、プラトン著作の原典復原を中心として愼重に取上げられてゐるのである。その結果、プラトン寫本の探索となり、學者たちの久しい撓まざる苦心の結果、今日では、全世界にプラトン寫本は、アルヅス版發行（西紀一五一三）以前に屬するものゝみでも、百七十四種存在してゐることが判つてゐる。しかるにプラトン寫本の傳承と關聯して、ラテン譯、アラビア譯、アルメニア譯本の外に、十九世紀の末葉から今世紀にかけて、エジプトより出土してゐるプラトン草紙文書がある。その上、各のプラトン寫本には、それぞれの歷史があつて、到底こゝでその悉くに觸れることは出來ない。また、古典學研究の上からいつても、寫本と寫本の間には判讀を異にしてゐるものが多く、その何れを取るかによつて、プラトン哲學の解釋上問題になるものが少くない。殊に、プラトン哲學の中心問題と不離の關係にあるプラトン作品個々の書かれた順序及び年代決定の問題、そして、この研究の展開を容易にならしめて不拔の功績を齎らせた文體統計學上の問題等がある。が、それらは、こゝで取上げられてゐる課題外のことに屬し、寧ろ、いまは此らの難問に近づく序說として、凡そプラトン寫本は如何にして、今日迄傳承されてゐるのであるか、また、傳承せられてゐるものには、如何なる寫本があるか等の概要を見ることは許され得る一つの課題であらうかと思ふ。

この課題と關聯して「古代希臘に於けるアテナイの圖書館とその發掘碑文について」（「書物展望」昭和十四年一及二號）參照。

プラトンの作品中「パイドン」を讀むと、アナクサゴラスの書について語り、その拔萃を揭げて、ソクラテスがこの書を精讀してゐたことを傳へてゐる。[1] 更に、同じアナクサゴラスについて「辯明」では

「彼等はクラゾメノス人アナクサゴラスの書 βιβλία がこの種の說で充されてゐることを知らないかと思つてゐられるのか。そして、青年たちが、私から學ぶと言はれてゐるところの知識といふのは劇場へ行つて高々一ドラクマも出せば大抵買ふことの出來るもの[2]」

といひ、また「テアイテトス」の中ではメガラのエウクレイデスが、ソクラテスとテアイテトスとの間に交された會話を思ひ出して書きつけて置き、奴隸をして彼と客とに高らかに讀ましめたとある。[3] なほ、他の作品中では、ソクラテスの言葉として書籍よりも記憶を推賞してゐるやうにも見えるところがある。そこで、以上の手短かい引用章句からしても、ソクラテス時代に書物が廣く讀まれてゐた事實を窺ふことが出來るであらう。

更に、プラトン自身書物を蒐集してゐたことについては、プロクロスの斷片にその片鱗を傳へてゐる。乃ち、彼の弟子なる

「ポントス人のヘラクレディスが言つてゐるのに、プラトンは當時名聲のあつた詩人コホイリロスのものより、アンティマコホスのものをひどく珍重して、ヘラクレィデスに說いて彼自らコロプホ

ンに赴き、この人（アンティマコホス）の詩を蒐集して來るやうにした[4]」

とあり、また

「そのうちには*サツュロスも含んでゐるが、ある人々の話では、彼（プラトン）はシケリアのディオンに書を寄せてプヒロラオスから、（代）百ミナで三つのピュタゴラスの書を得て呉れと言つた[5]」

とある。

* サツュロスは西紀前二二〇—二〇四年頃アレクサンドリアにゐた「ペリパトイ學派の」といはれた傳記學者、このサチュロスの「エウリピデス傳」P. Oxy. 1176 は、エジプトから出土した草紙文書で名高い。

ディオゲネス・ラエルティオスは

「プラトンは、ソオプロンの狂言の書をアテナイにもたらせた第一人者と考へられてゐる[6]」と說明してゐる。

その外、彼の自然科學に關する諸書を見ると、その背後には過去の多くの研究業績が土臺となつてゐることを知るが、特に、晩年の作品といはれる「政治」篇、「法律」篇を繙くものは、彼が頗る廣汎にアテナイ、及び各地の政治形態、幷びに立法等を研究し、それらに深く通曉してゐたことを知つて驚くのである。そして、いまこれらの記述を綜合すると、元來、プラトンは愛書家にして、諸の書籍の蒐集に腐心してゐた事實だけは指摘することが出來る。勿論、この書物はアカデメイア學園に於ける彼、及び

研究生たちの調査研究資料であつたことは言ふ迄もない。從つて、其處の文庫には、既に多數の書籍が所藏されてゐたと推定してもよいのではなからうかと思ふ。

すると、プラトン自身の作品といはれるものは如何にして著はされ、それはまた、どうして傳承されるやうになつたのであらうか。これを説明するためには、屢々引用されてゐる名高い挿話がある。すなはち、ディオゲネス・ラエルティオスの言葉として

「ある人々が傳へてゐるのにはオプス人プヒリポッスは蠟板に遺されてゐた彼（プラトン）の『法律』を書き寫したのであつたと。が、實は『エピノミス』が彼（プヒリッポス）の著述であるともいつてゐる。また、エウポリオンとパナイティオスが語るところでは『國家』の初めには多くの修正がなされてゐるのを見ると」[7]

このところをスキダスで見ると

「（オプス人プヒリッポス）は哲學者にしてプラトンの『法律』を十二卷に區分し、且つ、彼自ら第十三卷を加へたといはれてゐる」[8]

彼は外に「プラトン傳」を書いたと傳へられてゐる。ヘルキュラニウムのプヒロデモス文庫から、出土した文書の中には「アカデメイア哲學者表」を掲げてゐるが、そこにこのプヒリッポスのことに觸れ

「（彼は）占星學者……プラトンの書記生で、且つ、聽講生であつた」[9]とある。

なほ、後でより詳細に觸れるであらうが、今日一般のプラトン學者の意見では、この書の內容と、その文體樣式と、更に、右に引用したディオゲネス・ラエルティオス、及びスキダス等の言葉から「法律」が此の哲學者の最後の作であり、その上「エピノミス」が未完成のまゝにあつたのを、彼の弟子であつたオプスのプヒリッポスが、アカデメィア學園に於ける講義を土臺として完成したものであらうといふことに一致してゐる。

ところが、若し、これらの記述にある程度の信を置き得るならば、いま見逃してはならぬことは、この蠟板はプラトン自ら手を下して書いたものか、或ひはプヒリッポスが侍したプラトンの講義を錄したものであるかにある。現在、ティラア敎授はアリストテレスが引用してゐるプラトンの「書かれざる學說」ἄγραφα δόγματα を根據として、アカデメィアでは草稿なしで講義してゐたやうに解釋してゐる。[10] それにも拘らず、プラトンの作品と言はれてゐるものは、彼自ら手を下して修正若しくは改竄したと見るべき充分の根據がある。

後で述べるが、アリストブハネスはプラトンの作品十五篇を揭げ、ディオゲネス・ラエルティオスは三十六篇を擧げてゐる。また、後世の作家オリュムピオドロスは「彼は素朴な熱情を以つて十二卷の『法律』と共に、十一卷より成る「國家」を著はした」[11] 更に、ポルプヒリオスの「プラトン傳」を底本として書いたバアル・ヘブライオス（西紀一二二六—一二八六）の「プラトン傳記抄」では「アレクサンドリアのテオンはプラトンによつて書かれた三十三册を算へてゐる。その中に「國家、法律、プハイドロス、テマイオスがある」といつてゐる。この底本となつたポルプヒリオロスの「プラトン傳」は、アプレウスの其れと共に、窮極はア

レクサンドリアの學者アレイオス・ディデュモスに遡ると考へられてゐる。[12]

さて、アカデメィアでは、プラトンの書は學園の至寶として傳承し、且つ、アカデメィアの學徒たちは、それを中心として各自の研究を發展せしめたものと想像することが出來る。しかも、アカデメィア學園はプラトンの創立した西紀前三八七年よりユスティヌス皇帝の大學閉鎖令が下つた西紀五二九年迄、九百十六年の間、古の學府アテナイにあつて、連綿としてその傳統を誇つてゐたのである。從つて、既に多くのプラトン學者たちが想定してゐるやうに、この長い期間、プラトンの著述が尊敬と思慕を以つて、極めて鄭重に取扱はれた爲に、その作品の全部が、比較的完全な姿で後世に傳つたとも言へるのである。

西紀前一年七月一日附で、キケロが親友アティクス宛に書いてゐる書簡を讀むと

「ヘルモドオロスさへもそういふ事はしなかつた、勿論、彼はプラトンの書 Platonis libros を回覽したが、それで『ヘルモドオロス對話篇を巡覽せしむ』と言はれるやうになつたのである。[13]」

このヘルモドオロスは、シケリア島の出、プラトンの門下生にして後「プラトンについて」及び「數學について」を著はしてゐる。[14] そこで、キケロの言つてゐる意味は、彼の命なくしてアティクスがキケロの本を發行することを責め、その場合、諧謔的にプラトンの門下生であつたヘルモドオロスが、師の許可なしに、その講義錄を回覽せしめたことの例を擧げたのであつた。これで見ると、プラトンの作品

はアカデメィア本以外に早くより人々の手に渡つて讀まれてゐたことが窺はれる。

また、プラトンの側近にあつて久しい間、彼に師事してゐた高弟アリストテレスの著述を讀むと、屢〻プラトンの書を引用してゐるが、就中、プラトンの著として書名幷びに引用章句を掲げてゐるものに「國家」「ティマィオス」「法律」の三對話篇がある。そのほか「プハイドン」「プハイドロス」「シュムポシア」(饗宴) をもプラトンの書と記し、「ゴルギアス」「メノン」「小ヒッピアス」からも引用句がある。また、彼は「プヒレボス」「ソプヒスト」「政治家」には親しく、「修辭學」の中では「辯明」をプラトンの書と認めてゐる。更に「リュシス」「カハルミデス」「ラァカハス」等もアリストテレスに知られてゐたと考へられてゐる。(15)

なほ、プラトンの作品は、學園の後繼者たち、スペウシッポス、クセノクラテス、クラノオル、アルケシラオス、カルニアデス等によつても研究せられ、彼等の書中屢〻引用せられてゐる。更に、アカデメィア以外の人々ではペリパトイ幷びにストアの學徒たち、殊に、ストア哲學とプラトン哲學の連繫を企圖したパナイティオスとポシドニオスには深く研究されてゐる。ロオマではキケロ以來、廣く愛讀せられ、第二世紀に至つて、アンティオコホス、プルタルコホス、ツラのマクシモス、ラリッサのプヒロン等、多くのプラトン學徒を輩出してゐる。アレクサンドリアからは「唯一なるものとヌウス」の問題をかゝげて起つた新プラトン學派のあることは忘れることが出來ない。のち、其處には、教父時代クレ

メンスが出で、これにつゞくものにオリゲネス、聖アウグスティヌスがある。また、特に、現在プラトンの作品から多くの引用句を殘してゐるストバイオスとエウセビオスがゐる。

すると、直ちに今では如何なるプラトン作品の寫本が傳承してゐるのであるか、傳承してゐるものは如何なる系統のものであるか、現在傳承してゐるプラトン寫本と、先に掲げた人々が用ゐてゐるプラトン著作とは如何なる關係があるか、また、傳承の寫本はプラトンの眞作のみであるのか、或ひは、前世紀の獨乙の學者たちが論難に力めたやうに、多くの僞作篇が含まれてゐるのであるが、それのみならず、吾々はエジプトの乾燥土中より幾篇かのプラトン草紙文書を發掘してゐるが、これらはプラトン寫本傳承の上から如何なる位置を占めるものであらうか等の問題が起つて來る。

(1) Plat. Phaedo. 97b—98b.

(2) Plat. Apol. 26d. 久保・阿部譯岩波文庫本「辨明」による。

(3) Plat. Theaet. 143 ad.

(4) Proclus, in Plat. Timae. A 28e.

(5) Diog. Laert. III 8.

(6) Diog. Laert. III 18.

(7) Diog. Laert. III 37. エウポリオンは西紀前二七五年カハルキスの生れ、アテナイではアカデメィアのラキュデス、ペリパトイのプリタニスに就く、後、アンティオケィアの圖書館長として就任、寧ろ詩人として名高い。パナイティオス（西紀前一八五若しくは一八〇年生、一一〇年頃歿）はストアの學頭としてロオマのスキピオ家と親しく、ロオマの貴人達に影響す

[illegible] W. W. Jaeger. Philippos von Opus. 1914. 18ff.

(8) Suidas, *Φιλόσοφος.*

(9) P. Hercul. ed. s. Mekler 1902, 13.

(10) A. E. Taylor, Platon, the man and his work. 1936, 10.

(11) A. Westermann, Vita script. gr. 1845, 382.

(12) J. A. Notopoulos, Porphyry's Life of Plato. cl. philol. 1940, 284ff.

(13) Cicero. ad. XIII 21, 4., Zenob. V. 6. Proleg. a Olympiod. ch. 24.

(14) Suidas, *λογίοι.*

(15) [illegible] E. Zeller, Die Philosophie d. Griechen. II 1, 1922, 447 ff.

〔[illegible]〕

Allen, T. W.　Codex Oxoniensis Clarkianus. 39 phototypice editus. Leyden 1898—9, 2vol.

Alline, H.　Histoire du texte de Platon. 1915.

Bekker, I.　Platonis. I. 1926, 101—160.

Campbell, L.　Plato's Republic. ed. B. Jowett and L. Campbell. II 1894, 67ff.

Clark, A. C.　The descent of manuscripts. 1918, 383ff.

Green, W. C.　Scholia Platonica, 1938.

Grote, G.　Plato. I London 1867. 132ff.

Hensel, R.　Vindiciae Platonicae. 1906, 41ff.

Huit, M. Ch. La vie et l'oeuvre de Platon. II 1893, 381ff.

Immisch, O. Philologische Studien zu Platon. II 1903, 1—110.

Jordan, A. De codicum Platonicorum auctoritate. 1874, 1—32.

Zu den Handshriften des Plato. Hermes XII 1877, 161ff.

Klibanky, R. The continuity of the Platonic tradition during the Middle Ages, 1940.

Omont, H. Platon's codex Parisinus A. Facsimile en phototypice. Paris 1908, 2 vol.

Post, L. A. The Vatican Plato and its relations, 1934.

Rabe, H. Die Platon-Handschrift (Rhein. Museum. N. F.) 63. 1908, 325ff.

Ritter, C. Platon. II 1910, 187ff.

Schanz, M. Studien zur Geschichte des Platonischen Textes. (Philologus.) 1876, 643—670.

Ueber den Platoncodex der Markus bibliothek in Venedig. Apped: Class 4 Nr. 1. 1877, 1ff.

Shorey, P. What Platato said. 1933, 452ff.

Ueberweg, F.-K. Praechter, Die Philosophie des Altertums. I 1926, 187ff.

Usener, H. Unser Platon text (Kleine Shriften) III 1914, 104ff.

Waddell, W. W. The Parmenides of Plato. 1894, 1 XXIIIff.

Wilamowitz-Moellendorff, U. von Platon. II 1919, 328—334.

Wohlrab, M. Die Platonhandschriften and ihre gegen seitigen Beziehungen. (Jahrb. f. cl. Philol.) Suppl. XV 1887, 641—728.

Zeller, E. Die Philosophie der Griechen. Zweiter Teil, erste Abteilung. 5. 1922, 436ff.

二、アレクサンドリア圖書館とプラトン研究

さて、プラトン作品の寫本について言及してゐる古典作家たちの記述を見ると、最初にアレクサンドリアの第四圖書館長ビュザムティオンのアリストファネス（西紀前二五七―一八〇年頃）に關して、ディオゲネス・ラエルティオスが次のやうに述べてゐる。

「文典學者アリストファネスをも含むある人々は、これら（プラトン）の對話篇を三篇群に排列してゐる、彼等は

（Ⅰ）國家（ポリティア）　ティマイオス　クリティアス

（Ⅱ）ソフィステス　政治家（ポリティコス）　クラテュロス

（Ⅲ）法律（ノモイ）　ミノス　エピノミス

（Ⅳ）テアイテトス　エウテュプロン　辯明（アポロギア）

（Ⅴ）クリトン　プハイドン　書簡

そして、その外は、何等定つた順序もなく取扱はれてゐる」(1)

こゝに、言及せられてゐるビュザムティオンのアリストファネスは、アレクサンドリアの輩出した最も秀れた文典學者の一人である。スキダスは

「六十二歳にしてアポロニオスの後を襲ひて王宮圖書館長となる」[2]

といひ、このアポロニオスは、スキダスによると詩人にして普通ロオドスのアポロニオスと同一人と解してゐるが、之は、新出土の草紙文書(パピリ)によつて、その記述が誤謬であることが明白になつてゐる。すなはち

「彼（エラトステネス）の後、ビュザムティオン人アペロスの子アリストプハネス來れり、次に、エィドグラプホス（分類家）とよぶアレクサンドリアのアポロニオス」[3]

とあつて、アレクサンドリアの圖書館長は

第一代　ゼノドトス

第二代　ロオドスのアポロニオス

第三代　エラトステネス

第四代　ビュザムティオンのアリストプハネス

といふ順序でなければならぬ。彼は、幼にして、ゼノドトスに就き青年時代エラトステネスと共に、カリマコホスに師事したとある。

アレクサンドロス大王の死後、エジプトに王國の基礎を築いた初期のプトレマイオス王達――プトレ

マイオス一世（西紀前三〇五―二八三）プトレマイオス二世（西紀前二八三―二四五）――が、國都アレクサンドリアに學術の最高機關「ムウセイオン」Μουσεῖον すなはち、學藝の女神ムウサイの學園を創設して、諸方より學者を招き、他方、諸國よりあらゆる圖書の蒐集に盡力したことは、あまりにも有名な話である。そこでは、また學者たちがこのやうに蒐集された圖書の研究を初め、それらを比較校合して古典籍の校定本の作製に從事してゐたが、同時にこれ等の圖書の藏書目錄をも完成したのであつた。例へば、ホメロス以下ギリシャ古典の校定は第一代圖書館長ゼノドトス以來の繼續事業として引續きなされてゐるが、これに反して「圖書目錄」Πίνακες のみは、宮廷詩人カリマコホスの下に於いて成し遂げられてゐる。そして、彼の弟子文典學者ビュザムティオンのアリストプハネスは、師の「圖書目錄」作成に助力すると共に、校定事業ではホメロス、ヘシオドス、アルカイオス、アナクレオンの校定本を完成し、就中、詩人ピンダロスの作品を集大成校定した第一人者である。その外、彼が手をつけたものには悲劇詩人の作品もあるのではないかと思ふ節がある。つまり、この時、彼は圖書館所藏のプラトンの作品をも整理し、之を三部宛に排列して、ディオゲネス・ラエルティオスが傳へてゐるやうな、プラトン作品のアレクサンドリア本を發行したものと考へられる。すると、當然問題になることは、ディオゲネス・ラエルティオスの引用してゐる史料の出所であるが、それは頗る錯綜してゐるから、こゝではその概略のみを述べることにしよう。

つまり、アリストプハネスと同時代人にして、同じアレクサンドリアのムウサイの學園にあつてカリマコホスに師事してゐた爲、嘗つて「カリマコホスの」ヘルミッポス（西紀前三―二世紀）と呼ばれてゐた傳記學者があつたが、このヘルミッポスはカリマコホスの「圖書目錄」を底本として「傳記（ビオイ）」を著はしてゐる。しかも、この書の中には「哲學者篇」をも含んでゐて、後年多くの學者たちの利用するところとなつてゐるが、ディオゲネス・ラエルティオスも亦屢〻之から引用してゐる。例へば、プラトン傳と關係して名高い挿話は「ヘルミッポスの言葉によると、彼（プラトン）はオリュムピア祭第百八回の第一年（西紀前三四八/七年）婚姻の宴に於いて歿した、享年八十一歳」[4]といふところである。恐らく、この所はカリマコホスの「圖書目錄」に載せられてゐた記述を、そのまゝ寫したものと考へるが、アリストプハネスが分類したといふプラトンの對話篇に關する部分も、また、ヘルミッポスの「傳記」よりの援用と見ることが出來る。すなはち、ヘルミッポスは同門の文典學者アリストプハネスと共に、カリマコホスの「圖書目錄」作成に助力したと考へるべき充分の根據があるが、この間の事情を詳さに知つてゐる彼は、後年、特に「傳記（ビオイ）」の著述に當つてプラトンの著作集に觸れた時、「圖書目錄」中のプラトン著作表を掲げ、これはアリストプハネスの排列になつたものなることを書き殘したものと思ふのである。このところは、なほ一層精細な考究を要するが、ディオゲネス・ラエルティオスが今日吾々に殘してゐる、アリストテレス以下多くの哲學者達の著作表は、大體アレクサンドリア圖書館の所藏本であつたことには誤

りなく、且つ、それらの史料は、主としてヘルミッポスの「傳記」を通して、カリマコッスの「圖書目錄」に還元されることの出來るものである。(5)

そこで、アリストプハネスが分類したといふ表に戻つてゆくが、留意すべきことは、古代の傳說では、プラトンの最後の作は「法律（ノモイ）」、それからオプスのプヒリッポスが編したといふ「エピノミス」であつたことは既に述べた。若し、それが正しいのであれば、この表は一見して著作年代の順序でないことが明かである。つまり「エピノミス」の後に、なほ六篇の作品名が記されてゐる。さればといつて、それは字母順でもないのである。その上、アリストプハネスのアレクサンドリア本は、五つの三篇群、總數十五篇のみを掲げ、その他は「何等まとまつた順序もなく取扱はれてゐた」とあつて、次に掲げるツラシュロスが分類したと傳へられてゐる三十六篇の作品表に比すると甚しく不完全といはねばならぬ。いま、ツラシュロスの分類を見ると四篇群（Ⅰ）「エウテュプロン　辯明　クリトン　プハイドン」は哲學者ソクラテスの生涯を表現する構想の下に、排列されてゐると註記してある。ところが、此の順序は、アリストプハネスの三篇群（Ⅳ）「……　エウテュプロン　辯明」（Ⅴ）「クリトン　プハイドン　……」にも、その儘現はれてゐるのである。すると、アリストプハネスは、新定本の發行に際して、或る程度迄、從來の傳統を墨守したと見ねばならぬ。その上、アレクサンドリアに於ける文典學者たちの校定及び註釋等の研究の迹を見ると、總じて古典的な傳統に對しては、出來るだけの敬意を拂ひ、恣意に新說

を立てることを避けてゐるかのやうである。そして、文中の誤謬が極めて明白でない限り、之を訂正することをなさず、原文に對しては、力めて現狀維持固守の保守的態度をもつて臨んでゐる。從つて、アレクサンドリア學府を貫くものは學問上の折衷主義に終始してゐるとも言へるのである。そして、これは古典の校註事業のみならず、アレクサンドリア學派の學問的體系のあらゆる部門に於いても、言ひ得る共通の現象であつた。さて、かゝる觀點から、アリストプハネスの分類を眺めると、これは彼によつて新らしく作られたとすることに疑を挾む餘地があるのではないかと思ふ。或ひは、アテナイ碑文に錄されてゐる書籍目錄のやうに製本の便宜に從つて、適當な長さの三篇群を組合はせたものであらうか。(6)

さて、こゝで、所謂、アレクサンドリア本の性質をよりよく理解する爲に、アレクサンドリア學府に於けるプラトン研究の傳統を辿つて見よう。自然科學の分野に於いて、極めて華々しい業績を展開して行つたアレクサンドリアでは、その初期に當り、數學の部門にアカデメイア數學の正統を、この地に移植して大成した偉大な數學者エウクレイデスを出してゐるが、これにつゞくものにはエラトステネスがある。然るに、思索の方面ではその貧困さを雄辯に物語つてゐる。その理由は、初期のアレクサンドリア學派の學者たちはペリパトイ學派の實證的な研究方法の影響を受けたものが壓倒的に多く、プラトン哲學に至つては、「ムウサイ學園」創立後二百年の間は、體系的な研究を停止してゐたと言へるのである。但し、これは必らずしも、この間、アレクサンドリア學府でプラトン研究がなされなかつたといふ謂で

はない。例へば、エラトステネスは、アテナイに遊學中、中期アカデメアの創立者にして、同學園第四代目の學長アルケシラオス（西紀前三一五―二四一）に師事し、のち、數學の書「プラトニコス」（ティマイオス註釋）を著し、ムウサイの學園で、彼は第二の、若しくは若きプラトンと仇名されたとも傳へられてゐる。[7]

また、同じアルケシラオスの弟子であつたパナレトスは、プトレマイオス三世エウエルゲテス（西紀前二四七―二二一）からアレクサンドリアの宮廷に招かれ、年額十二タランタの王帑を受けたと言はれてゐる。彼がムウサイ學園の哲學者として招聘されたものであることは疑ひ得ない。[8] 前掲のビュザンティオンのアリストプハネスが、プラトンの對話篇を三篇群に排列したといはれるのは、恰もこの前後のことであつた。そして、このアリストプハネスの著述の中には「語彙篇」Λέξεις の著があるが、それにはプラトン語彙」があつたと考へられてゐる。これを用ゐて、後年「眞鍮頭の」Χαλκέντερος ディデュモス（西紀前八三―西紀一〇頃）が「プラトンによりて創意された言葉について」（但しこの書はアレイオス・ディデュモスの著とも考へられてゐる）を著し、また、「ムウセイオン」の文典學者のアムモニオスは「ホメロスより受けたるプラトンの影響について」なる一書を著述してゐる。[9]

然るに、此の地にプラトン哲學の研究が擡頭して來たのは、第五アカデメイア學派の創立者にして、同學園の第十三代學長に當るアスカロンのアンティオコホス（西紀前六八年頃歿）の頃からである。彼は、アカデメイア學園の學長就任以前、西紀八六年頃ロオマのルユクルスに伴はれて、アレクサンドリアに赴き、

のち、この地に滯つてラリッサのプヒロンに反駁する名高い文書「ソソス」を完成したのであつた。[10]

このアンティオコホスの弟子の中には、西紀前五六年ロオマへ使節に行つて、そこで非業な最期を遂げたプラトン學者アレクサンドリアのディオンがゐる。[11] また、アンティオコホスのアレクサンドリア滯在中、そこには彼の友にしてプラトン學者なるツュロスのヘラクレイトスがゐた。[12] 彼の門からは、アウグスツス皇帝の師にして皇帝から厚く信任せられたアレイオス・ディデュモスが出た。すなはち、このディデュモスについてアウグスツスがアレクサンドリアを陷れた時、宣言して、アレイオスの爲に、彼の都市を破滅から救ふといつたとさへ傳へられてゐる。[13] ディデュモスは、西紀前九年ヴルシスの死に際し、リヴィアに「慰めの辭」を捧げたといふ名高い話の外、學說史「プラトンの調和について」及び、「ピュタゴラス哲學について」の二著と哲學者傳を編纂したが、その中には「プラトン傳」を含んでゐたと考へるべき理由がある。同じ頃の學者に、アレクサンドリアのエウドロス（西紀前二五年頃）がゐる。彼は「プラトンのティマオス註釋」「アリストテレスの形而上學の註釋」幷びに「範疇論」を著はしてゐる。そして、これらの書中、頗る廣汎な文獻史料によつて學說誌を述べてゐるところから、彼がアレクサンドリア圖書館の資料を自由に使用し得た結果と考へられてゐる。[14] 後で述べるプラトンの作品を四篇群に分類したデルキュリデスも、メンデスのツラシュロス（西紀三六年歿）も共にアレクサンドリアと關係がないとは言へない。この外、その頃ゐたアレクサンドリアのポタモン、及びプルタルコホスの師で

あつたアムモニオスも、またプラトン學者であつた。

こゝで、久しく中絶の形にあつたプラトン研究が西紀前八五年前後を限界として、一時に盛んになつて來たことと、アリストテレス及びテオプラストスの書籍を含むアペリコン文庫が世に出で、それを西紀前八四年スラがアテナイで押收してロオマへ送つた時と符節を合はし、こゝに何等かの因果關係があるのではないかと想像されるのである。例へば、アリストテレスの文庫中にプラトン全集があつたと考へることは、アリストテレスの著作からも充分窺はれるが、傳へるところではアリストテレス自ら、アカデメア第二學長プラトンの甥スペウシッポスの死後、その文庫を購入したとある。また、ルキアノスの記述によると、スラはデモステネス及びツキュディデスの寫本もロオマへ送つたと報告してゐる。(15) この時、或ひはプラトンの寫本も同じ運命を荷つたのではなからうか。例へば、現在傳承されてゐるプラトン寫本はこの前後發行のアティコス本（次章參照）に近く、所謂アレクサンドリア本ではないのである。

また、その頃アレクサンドリアには、プラトン哲學を根幹として後世同學派に大きな影響を與へたユダヤの哲學者プヒロン（西紀一―四〇年頃盛名）がゐた。特に、ロオマ帝政の初期、古代希臘學藝の復興時代と呼ばれるツライアヌス――ハドリアヌス皇帝時代以後引續き、アレクサンドリアを中心として、プラトン研究が盛んであつたことは、エジプト出土のプラトン草紙文書についても明かである。すなはち、出土してゐるものゝ數に於いて、西紀二、三世紀に屬するものが斷然多い。また、現在傳承してゐる寫

本の傍註（スコリア）には西紀二世紀に遡るものもあるが、獨立せる註釋書としても、同時代のものにベルリン國立美術館所藏のヘルモポリス出土、作者未詳の「プラトンのテアイテトス註釋書」P. Berlin 9782 及び、テアデルピア出土の「プラトンのプヒレボス」並びに「プハイドロス註釋書」の斷片 P. Berlin 8 等がある。

恰も、その頃アレクサンドリアの「ムウサイ學園」には、明かに哲學講座の設備があり、且つ、その中に「プラトン哲學者」と呼ばれる學者がゐたことを證する考古資料が出土してゐる。

ムウサイ學園プラトン哲學者ディオニユソドオロスの碑文

碑文年代。西紀二—三世紀の大理石面に書かれたる文字。埃及古代アンティノポリスの廢墟より出土。（寫眞參照）

Αγαθῇ Τύχῃ

Φλαύιον Μαίκιον Σε [ξτοῦ ἓον]

Διονυσόδωρον τῶν [ἐν τῶι]

Μουσείωι σιτουμέ [νων ἀτελῶν]

Πλατωνικὸν φιλό [σοφον καὶ]

βουλευτὴν Ἀν [τινοέων Νεῶν]

Ἑλληνων ἡ [βουλή]

「幸運（の神）に

アンティノエポリス新ヘラス人たちの評議會は、フラウィウス・マイキオス・セクスツスの子なるムウサイ學園の給扶幷びに公役貢稅免除禮遇プラトン哲學者にして、評議會議員ディオニュソドオロスのために（奉獻す）」

ところで、碑文からこのディオニュソドオロスがアンティノポリス市のロオマ市民權を有する貴族の一人であることは判るが、その外彼に關して、古典籍は何事も傳へてゐない。但し「ムウサイ學園」の哲學者碑文は、これ以外、數箇出土してゐる。しかし、プラトン哲學者碑文はこれのみである。そこでこれらの資料から推すと、「ムウサイ學園」にはパナレトス以來、後世迄王帑給扶の哲學講座があつたと思はれる。

更に、埃及オキシリンコス出土の西紀三世紀に屬する「圖書目錄草紙文書」があるが、これにはプラトンの作品二十五書目が順序不同に列記されてゐる。[17] すなはち、當時ナイル河の上流の一小都市で、なほ廣くプラトンの著作が愛讀せられてゐた事實を物語つてゐるのである。

このやうに、アレクサンドリアを中心として新らしく出發したプラトン研究は、西紀第三、四世紀に至つて、愈〻成熟し、先づこの地のアムモニオス・サッカス（西紀一七五—二四二）の下から、エレニオス、オ

リゲネス、プロティノスの三人の秀れた學者を輩出してゐる。そして、このプロティノス（西紀二〇五—二七〇）を祖として、古代哲學史上最後の光芒を殘した新プラトン學派が生れたのであつた。更に、プロティノスからアメリオス、ポルプヒリオス、イアムブリコホス、イウリアヌス皇帝等を經、第五世紀にはアレクサンドリアのテオン、幷びに、西紀四一五年、基督敎徒のために虐殺された彼の娘ヒュパティアによつて「ムウサイ學園」は新プラトン學派の中心地となつて活動し、多くの學者を出してゐる。ヒュパティアを繼いだものは、ヒエロクレス（西紀四一五—四五〇頃）であつたが、次はスリアノス、その後「プラトン傳」「プラトン註釋書」を以つて名高いプロクロス（西紀四一〇—四八五）出で、更にヘルメイアス、アムモニオス父子がアレクサンドリアの學統を繼承した。そして、次のダマスキオスの時、ユスティヌス皇帝の大學閉鎖令（西紀五二九）が下つたのであつた。しかも、アムモニオスの弟子オリュムピオドオロスは五六四年以後もなほ、この地にあつて活動し、「プラトン傳」の外、プラトンの作品中「アルキビアデス、ゴルギアス、プヒレボス、プハイドン」等の註釋書を著はし、これらの書は、幸ひ現在迄傳承されてゐる。彼以後、新プラトン學派の命脈は跡を絕ち、終に、古代希臘哲學の上に最後の日が來たのであつた。

(1) Diog. Laert. III 61—62.

(2) Suidas, Aristophanes.

(3) P. Oxy. 1241.

(4) Diog. Laert. III 2=Hermippus frag. 33. (FHG. III 43)

(5) この所は近く發表する「アンタキンドリアト圖書館の圖書目錄」なる論考にて詳說する。

(6) 西紀前一世紀又は二世紀に屬する碑文 IG II² 2363. U. Wilamowitz-Moellendorff, Euripides Herakles. I 1889, 150ff.

(7) Procl. Tim. 186e, Iamb. bei Stob. I 3787w. Suidas, Eratosthenes.

(8) Athen. XII 552c. Aelian. H. V. X 6.

(9) H. Alline, Histoire d. Texte d. Platon. 1915, 141ff. Gudeman, Scholien [P-W] II Reihe II. 1921, 704.

(10) Cic. Acad. II 11ff. W. Schmid, Antiochos von Askalon [P-W] I. 1894, 2493f.

(11) W. Christ-W. Schmid, Gesch. d. Gr. Literatur. II 1920, 343ff.

(12) Cic Acad. II 5, 4.

(13) Dio Cass. Ll 16, Pult. Ant. 80, Apophth. 207.

(14) F. Ueberweg-K. Praechter. Die Philosophie d. Altertums. 1926, 530f.

(15) Diog. Laert. IV 5, Lucian adv. indoct. 4.

(16) Fr. Bilabel, Sammelbuch gr. Urkunden aus Aegypten. III 1926, 6012.

(17) M. Norsa, Elenco di opere leterarie. (Aegyptus) II 1921, 17—20. Postilla, R. Sabadini ibid. 20-23.

三、アンティパトロスの圖書分類目錄について

さて、以上はアンタキンドリアを中心としてアンティパトロスの研究、并びにその地位はされたアンティパ作

品の三篇群分類について述べたのであるが、以下後年、ロオマに傳承したプラトン著作の四篇群分類について論じよう。

これについて、ディオゲネス・ラエルティオスは次のやうに言つてゐる。

「ツラシュロス（西紀三六年歿）が語つてゐるのに、彼は（プラトンの）對話篇を悲劇（の分類）に從つて四篇群宛にして發行したと」[1]

「そこで、彼はこのやうに述べてゐるのである。つまり、「國家（ポリテイア）」を十篇に分ち、「法律（ノモイ）」を十二篇に頒つならば、眞の對話篇はすべて五十八篇ある。但し、「國家」が一篇としての地位を占め「法律」が一篇となるならば、九つの四篇群となる。

すなはち、彼の最初の四篇群は、共通の構想をもてるものを取つた。それは、彼が哲學者の生涯とはどういふ類のものであるかを表現せんことを欲したからである。そして、これらの書物の各には二つの表題を附け加へた。一つは話手の名から、他は主題目から。そこで、その

(I) 四篇群はこうである。第一に「エウテュプロン」或ひは「敬神について」そして、この對話篇は試問的なものである。第二に「ソクラテスの辯明」倫理的なものが來る。第三は「クリトン」あるひは「すべきことに就いて」といふ倫理的なものである。第四は「プハイドン」あるひは「靈魂について」といふ倫理的なものである。

（Ⅱ）四篇群は「クラテュロス」あるひは「名稱の正しさに就いて」といふ論理的なものより初まる。その次は「テアイテトス」あるひは「認識に就いて」といふ試問的なもの、それから「ソプヒステス」あるひは「有について」論理的なもの、「政治家」あるひは「王者について」論理的なもの。

（Ⅲ）四篇群は「パルメニデス」あるひは「イデアについて」論理的なもの、「プヒレボス」あるひは「快について」といふ倫理的なもの、「饗宴」あるひは「善について」倫理的なもの、「プハイドン」あるひは「愛について」といふ倫理的なもの。

（Ⅳ）四篇群は「アルキビアデス」あるひは「人體の本性について」といふ助産的な對話篇より初まり、「アルキビアデス第二」あるひは「祈願について」といふ助産的なもの、それから「ヒッパルコホス」「貪婪なるものについて」倫理的なもの、「愛を競ふものたち」あるひは「愛智について」といふ倫理的なもの。

（Ⅴ）四篇群は「テアゲス」あるひは「愛智について」助産的對話篇を冒頭に、「カハルミデス」あるひは「ラケヘス」あるひは「勇氣について」助産的、「リュシス」あるひは「友情について」助産的。

（Ⅵ）四篇群は「エウテュデモス」あるひは「論爭するもの」といふ論駁的な（對話篇）に初まり、「プロタゴラス」あるひは「賢者たち」といふ證示的な對話篇、「ゴルギアス」あるひは「辯論術に

ついて」といふ論駁的なもの、「メノン」あるひは「德について」といふ試問的なもの。

(Ⅶ) 四篇群は二篇の「ヒッピアス」で初まる。最初のは「美について」後のは「虚偽について」といつて、共に論駁的なもの、次は「イオン」あるひは「イリアスについて」試問的なもの、それから「メネクセノス」あるひは「葬送の辭」倫理的なものである。

(Ⅷ) 四篇群は「クレイトプホン」あるひは「說き勸め」といふ倫理的なものに初まり、「國家」あるひは「正義」について」國家學的なもの、「ティマイオス」あるひは「自然について」自然學的なもの、「クリティアス」あるひは「アトランティスの話」なる倫理的なもの。

(Ⅸ) 四篇群は「ミノス」あるひは「法律について」國家學的(對話篇)より初まる。次に「法律」あるひは「立法者について」といふ國家學的なもの、「エピノミス」あるひは「夜の集會」または「哲學者」といふ國家學的なもの、(それから)十三篇の「書簡」倫理的なものである」

慣例に從つて以下本文中、略して(Ⅲ)2、又は(Ⅴ)2・4とあるは右表中の(第三)四篇群第二篇目「プヒレボス」を指し、また(第五)四篇群第二篇目「カハルミデス」第四篇目「リュシス」を指すものとす。

更に、ディオゲネス・ラエルティオスは續けて

「人々は先に述べたやうに「國家」を初めとするが、また或るものは「大アルキビアデス」より、中には「テアゲス」より、更に、ある人々は「エウテュプロン」より、他のものは「クレトプホン」

より、さては「ティマイオス」より、また、あるものは「プハイドロス」より、なほ「テアイテトス」より、しかも、多くの人々は「辯明」より初める。そして、對話篇のうち（以下のものは）等しく僞作と認められてゐるのである。「ミドン」あるひは「種馬飼育人」、「エルフシアス」又は「エラシスツラトス」「アルキュオン」、「アルケプハロイ」あるひは「シシプホス」、「アクシオコホス」「プハイアゲス」「デモドニス」「ケヘリドン」「ヘブドメ（第七の日）」、「エピメニデス」これらのうち、「アルキュオン」はプハボリアスの「雜錄」第五卷ではさるレオンなるものゝ作であると見做されてゐる」

さて、以上の記述から、吾々が知るべきことは、西紀三世紀頃迄に於けるプラトン作品の排列順序には既に多樣な方法があつたが、それらの中ではツラシュロスの四篇群分類法が、特に廣く用ゐられてゐたことである。

こゝに述べてゐるツラシュロス（――西紀三六歿）は埃及メンデス人、ロオドスにて研究した學者と思はれる。史上に出て來るプラトン學者にして、ピュタゴラス學派に屬する宮廷占星學者として皇帝ティベリウスに厚く信任せられた名高いツラシュロスと同一人。[4] スミルナ出土の碑文に Tiberius Claudius Thrasyllus (IGR IV 1392) とある。

このところは、更にディオゲネス・ラエルティオスより一世紀計り以前に住んでゐたアルビノス（或ひはアルキノスに作る。西紀一五一―二年頃盛名のプラトン學者、ガイオスの弟子にして、ガレノスの師）の「プラトンの學說に

ついて」[8]を見ると、より明白である。すなはち、プラトン研究には、何れの對話篇から初めるべきであるかに就いて、彼の言葉として

「異つたまちまちの意見がある。或るものは「書簡」より始め、あるものは「テアゲス」より（始める。）その外にそれらを四篇群に分類したものがあつて、その第一の四篇群に含んでゐるものは

エウテュプロン　辯明　クリトン　プハイドン

つまり、「エウテュプロンは公判に於けるソクラテス訊問、「辯明」では辯護を必要とし、また「クリトン」では牢獄に於ける議論、それからプハイドンはソクラテスの生涯の終りを敍してゐる。これらはデルキュリデスとツラシュロスの意見である。彼等はこのやうに人とその生涯の出來事を幷べやうとしたごとくに思はれる。それは他の人々には有用であらうが、吾が望んでゐるところではない」

それから、彼自身は對話篇を劇と比較して論理的なもの、反對論的なもの、自然學的なもの、倫理的なものに頒ち、その上、主題的の四篇群を擧げ、且つ「アルキビアデス、プハイドン、國家、ティマイオス」は一連にして讀むべきことを推奬してゐる。

この一文から、次のやうなことが言へる。所謂、プラトン作品の四篇群分類は、先のディオゲネス・ラエルティオスが述べてゐるやうに、必らずしも、ツラシュロスの創案ではなく、彼以前にデルキュリ

デスのあつたことを想定せねばならぬ。然るに、デルキュリデスについては、殆んど何事も知られてゐないが、彼も同じくプラトン學者にして、少くとも、西紀前一世紀半以後に生活してゐたこと、幷びに十一卷より成るプラトン哲學に關する著述をしたことが傳へられてゐる。この上、更に古く W. Christ が指摘してゐるロオマの學者ウアロ（西紀前一一六―二七）の引用句を考慮する必要がある。すなはち、ウアロはプラトンの「プハイドン」を Plato in Quarto と言つて、彼がプラトン著作の四篇群分類に親しかつたことを物語つてゐるのである。

すると、プラトン作品の四篇群分類は、ウアロ時代から存してゐたことになり、確かにツラシュロス（―西紀三六年歿）が創案したと考へることは出來難くなる。

また、アルビノスの弟子で、古代に於ける偉大な醫學者として廣く知られてゐたガレノス（西紀一九二―一九九）がプラトンの「ティマイオス」の中にある醫學上の說明に觸れた時「アティコス校定本」（ἐν Ἀττικῶν ἀντιγράφων ἐκδόσεσι）では「ティマイオス」第七十七節 c に

ὑφ' ἑαυτοῦ κινήσεως（自己運動によりて）とあり他の校定本には

ἐξ ἑαυτοῦ κινήσεως（自己運動から）

と報じて、古來「アティコス校定本」なるものが存在したことを傳へてゐる。

現在ヴェネチア聖マルコ圖書館所藏第四一六デモステネス寫本F又はM、ミュンヘン圖書館所藏第八十五デモステネス寫本Bに

は διόρθωσις ἐν τῷ Ἀττικιανῷ とある。これを直ちに今いふポムポニウス・アティクスと解することには色々な異說もある。

さて、現在傳承してゐるプラトン作品の寫本を見ると、「ティマイオス」第七十七節cは總べて「アティコス校定本」の通りに「自己運動によりて」となつてゐるのであるが、更に、あとで詳述するやうに今日あるプラトン寫本のすべては整然と四篇群分類の形態をとつてゐることである。言ひ換ると「四篇群分類」は、アティコス校定本發行の時なされたものであり、言ふところのアティコスは、キケロの親友であるポムポニウス・アティクス T. Pomponius Atticus（西紀前一〇九—三二）に相違ないといふのが、Th. Birt, C. G. Cobet, H. Usener, W. Christ. 以來の學說である。ロオマ生れのアティクスが、アテナイに隱棲したのは西紀前八五年のことであつた。此の地にあつて、彼は諸種の企業を營んでゐたが、その傍ら學識ある奴隸を使つて古典籍の轉寫を業とし、廣くロオマの讀書界の要求に應じてゐたことはキケロの書簡が語るところである。[8] また、アティクスはキケロの外、カエサアル、ポムペウスとも親しく、特に、スラのアテナイ滯在中は、彼の信賴を受け共にロオマへ歸還することを勸められた程であつた。そこでスラが持ち歸つたアペリコン文庫と共に、ロオマに移入せられたプラトン全集はアティコス校定本の底本となつたアカデメイア本であつたであらうといふのである。そして、ロオマに入つてのち、時の文典學者テュラニオン監修の下で、アリストテレス寫本にはアンドロニコスが當つたやうに、プラトン寫本はデルキュリデス等が廣く「四篇群」[9]として發行したと思はれることは既に述べた通りである。

(1) Diog. Laert. III 56ff. W. Christ-W. Schmid, Geschichte der. gr. Literatur. 1920, 344ff.

(2) Diog. Laert. III 62.

(3) プラトン著作の中「偽作篇」として傳つてゐるものに次の六篇がある。「正義について」「德について」「デモドコス」「シシフオス」「ヒペクシオス」「アクシオコオス」

更に古典の作家の中では、アテナイオスは「ペキシエテス第二」Athen. XI 506e, シシシフオスは「アンチテスタ」Diog. Laert. IX 37, アイリアノスは「ヒシペルニオス」Ael. Var. Hist. VIII 2, ペクシシカスは「アイアス」Asclepins, Ar. Met. A. 6, 99163.

更にプロクロスは「國家」「法律」Procl. Olympiod. proleg. c.26. をプラトンの作とすることに疑問を投げかけてゐる。近代のプラトン學者によつては「イオン」「テアゲス」「ヒシピアス第一」「メネクセノス」「アルキビアデス第一」「ミノス」「クレイトポン」「ヒシペルニオス」がそれぞれ偽作と考へられてゐる。偽作のより詳しい表は P. Shorey, What Plato said. 1933, 452f. 參照。

(4) Tacit. Lib. VI 20—21, Sueton. Vit. Tib. 14. Cass. Dio. Hist. LV 11—12. C. Cichorius, Römische Studien. 1922, 392ff. W.. Vetter, Thrasyllus [P-W] II Reihe. VI 1930, 581ff.

(5) Albinos, Prolog. IV 149 ed. Hermann, Fabricius III 656.

(6) Simplic. in Phys. 247, 31 f. W. Kroll, Derkylides [P-W] V 1905, 242.

(7) Varro, Ling. Lat. VII 37, W. Christ, Platonische Studien, 1886, 3.

(8) Cicero, ad Quintum fr. III 4, 5.

(9) エジプト出土、現ベルリン美術館所藏の草紙文書 P. Berlin 9780「デマデモスのデモステネス註釋書」には、傳つてデモステネスの演説を四種類に分類された痕跡がある。 H. Diels u. W. Schubart, Didymi de Demosthene Com-

menta. 1904, 36.

四、現存するプラトン作品の寫本について

プラトン作品傳承の歴史に、一時代を劃したものは、一五一三年ヴェネチアのアルヅス・マニティウス（Aldus Manitius）の手になつた、所謂、アルヅス版の出現であつた。その發行に際し如何に多くの勞力が拂はれたかは、出版者自ら、黄金の價を以つてしてもその誤謬を除き度いともらしてゐることからも窺はれる。さてこのアルヅス版の底本となつたものは、西紀十五世紀ロオススの手寫した現在ヴェネチア聖マルコ寺院圖書館所藏プラトン寫本E（Cod. Marcianis 184—185）であらうと推定されてゐる。更に、アルヅス版發行六十五年後の一五七八年には、巴里からセラヌスとヘンリクス・ステプハヌス（Serranus et Henricus Stephanus）父子の所謂、ステプハヌス版が出版せられ、この書はその後二百年の久しきに亘つて學界の權威書と認められるに至つた。

然るに、近代的の意味に於ける古典學の立場から、プラトン典籍確定に基礎的な先鞭をつけたものは偉大な古典學者イマヌエル・ベッカア Immanuel Bekker（一七八五—一八七一）であつた。彼がプラトン校定本出版の爲に親しく諸國を探訪して校合し得たプラトン寫本數は、實に七十七種にして、わづかにオックスフォド大學ボドレアン圖書館所藏のプラトン寫本B（Cod. Clarkianus 39）を除く、主要なもの

は悉く自ら眼を觸れてゐる。そして、この成果が、プラトン研究に新段階を與へた、所謂ベッカア版十卷[1]（一八一六―一八二三）の出現であつた。ところが、その後ヴォルラァブ Martin Wohlrab[2] が一八八七年に報じてゐるところによると、世界に於けるプラトン寫本の全數は百四十七種あることになつてゐる。これにイムミッシュ O. Immisch が十一世紀の巴里本第六六八號を加へたから、久しい間百四十八種と考へられてゐた。

また、最近ポスト L. A. Post[3] 教授が發表したところでは、アルヅス版以前に屬する世界のプラトン寫本全數は百七十四種あることが明かになつた。

記憶すべきことは、既に縷言したやうに、現在各地、主として中歐諸國の各圖書館に所藏されてゐるプラトン寫本は、悉く四篇群分類のもの計りである。すなはち、アレクサンドリア本の三篇群分類に屬するものは一も見當らないのである。その上、此らの寫本のあるものには、所々傍註（スコホリア）の記入があるが、それらは、古くとも西紀二世紀以前に遡るものなく、概してそれよりも遙かなる後代、ビュザンティオン時代のものが多い。從つて、古代アレクサンドリアで盛名のあつた文典學者のいづれの名も記載されてゐない。この事實と、ホメロス寫本等の傍註の到るところにはアレクサンドリア學者の名が引用されてゐる事情とを比較すると、前々章に於いて詳述したアレクサンドリアの盛時には、プラトン研究は、深く顧みられなかつたといふ推定を、より判然とせしめるであらう。すると、現在傳承の寫本の古いも

のはツラシュロス本その儘かといふと、實はそうではない。左の表で明かなやうに、明確に手寫した日時の判つてゐる最も古いものでも西紀八九五年のものに過ぎない。そして、それ以前に遡り得るものは巴里の寫本Aあるのみである。

いま、現在傳承の主要なプラトン寫本を大體ベッカアに從つてシャンツ、バアネット、アリン幷びにブディ等が用ゐてゐる寫本符號によつて年代的に示すと(3)

A　Parisinus 1807.

B　Bodleianus (Clarkianus) 39.

T　Venetus app. cl. 4, 1.

O　Vaticanus gr. 1.

W　Vindobonensis 54.

C　Tubingensis gr. Mb 14.

D　Venetus 185.

P　Palatinus Vaticanus 173.

Y　Vindobonensis 21.

S　Venetus 189.

F　Vindobonensis 55.

M　Malatestianus Plut. 28 cod 4.

U　Angelicanus c 1 4.

L　Laurentianus 80, 17.

Z　Parisianus 3009.

R　Vaticanus 1029.

Δθ (Schanz V+D)　Vaticanus 225+226.

E　Venetus 184.

ところが、これらの寫本はプラトン作品の全部を收錄してゐるもの殆んどなく、その中、特に、プラトン典籍定本出版に當つて信據すべき基本底本となる、所謂善本系と言はれるものに完本が尠ないのである。

プラトン寫本A　現巴里國立圖書館所藏 Parisinus 1807（寫眞參照）

由來、この寫本と同じ手跡といはれてゐるオックスフォード大學所藏の西紀八九五年に寫されたプラトン寫本B（寫字生ヨハンネス）及び西紀八八八年に出來たエウクレイデス寫本（寫字生ステファノス）に比す

プラトン寫本A　（現巴里國立圖書館所藏 Cod. Parisinus 1807）

ると、一般にそれらよりも古く出來たものと考へられ、少くとも、西紀八五〇—八八八年に手寫されたものであらうと推定せられてゐる。(5)

次に、寫本Aの歴史について、次のやうな事柄が記録されてゐる。伊太利文藝復興期の最も盛なりし頃、フィレンツェのロレンゾォ・デ・メディチの命を受け、當時の名高い希臘學者ヤアヌス・ラスカリス Janus Lascaris（一四四四—一五三五）が、前後二回、東方への希臘古典籍探訪の旅に上り、コルフ、アルタ、カラマタ、サロニケ、アトス山、コンスタンチノポリス等に歴訪したことがあるが、彼は、メディチの死後、約二百卷の古典寫本を伊太利に將來した。この中には、巴里の名高いデモステネス寫本Σ（Parisinus 2945 十世紀初期の手寫、各頁二欄に書かれ各三二行、總計五三四頁、これは現在アレクサンドリア本系と考へられてゐる）も含んでゐた。そして、此の時彼が將來した多くの善本類は、恐らく、アトス修道院の文庫から齎らされたものであらうと傳へられてゐる。ところが、ラスカリスの死後、これらの寫本は法皇レオ十世の甥にして、時の大司教であつたニコラス・リドルフィ Nicolas Ridolfi に購入せられたが、その時、マティウ・デバリス Mathieu Devaris の手で購入書物の目録を作製した。その目録中で、プラトン寫本は、第九十五書目として記録されてゐる。ところが、一五五〇年、大司教ニコラスが歿し、更にリドルフィの財産を遺贈されたものが、ピエロ・スツロッチ Piero Strozzi に寫本全部を賣渡したのであつた。然るに、プラトン寫本Aの所有主のスツロッチも、またその八年後、一五

五八年ティオンヴィルの戰に戰死した結果、再轉して、これらの寫本の所有權はカタリン・デ・メディチ Catherine de Medicis に移つた。そして、女王カタリンの死後、一五九四年には、終に、この書は巴里王室圖書館の有に歸し、同圖書館希臘寫本番號一八〇七號を附せられたのであるが、それは一七四〇年のことであつた。また「プラトン寫本A」と命名したのはベッカアであつて、彼がベッカア版出版に際してゞあつた。(6)

さて、寫本Aは完本ではなく、その前半を缺いだ不完全な缺本である。すなはち、內容は三百四十四紙面、寫本の大きさは犢皮紙 35.5×24.8mm 保存極めて良、各頁は二欄、各欄は四十四行、各行は平均二十字より二十五字。

四篇群分類「Ⅶ 1 2 3 4」「Ⅸ 1 2 3 4」「定義」「僞書」を含む。

この寫本には、また、最初本文を筆寫したものゝ手によつて傍註(スコホリア)、及び、本文中の修正がなされてゐる。この外、所々に十二世紀の手跡の校正があるが、なほ最後の第三四四紙面の左側の傍白に、黃褐色のインクをもつて十四世紀頃の筆跡で、明白に

Ὀρθῶθη ἡ βίβλος αὕτη
ὑπὸ Κωνσταντίνου Μητροπολίτου Ἱεραπόλεως,
τοῦ καὶ ὠνησαμένου

「府都ヒエラポリスのコンスタンティノス
本書を校合し
且つ（本書の）所有者なり」

と書いてある。このコンスタンティノスに關し異說が多い。イムミッシェの說では、府都ヒエラポリスは、シケリアのヒエラポリスを意味し、そこにゐたコンスタンティノスは、プホティオスの門人哲學者レオン（西紀九―一〇世紀）の門下生の一人であつたと言つてゐる。(?) そして、寫本Aの本文中到るところに、このコンスタンティノスの手によつて校正された跡がある。バアネットは之を筆者aと呼んでゐる。

本書は、プラトン寫本中、基本寫本として最も重要な一つであることは、ベッカア以來何人も異論のないところである。

プラトン寫本B　現オックスフォド大學ボドレアン圖書館所藏 Bodleianus (Clarkianus) 39

この寫本の、英國へ搬出の歷史幷びに寫本の寫眞については、出隆博士「プラトン僧坊脫出記」（「英國の曲線」昭和十四年三一頁以下）參照。

內容は、四百二十四紙面の犢皮紙にして、寫本Aよりも多少薄い。寫本の大いさ 32.5×22.5mm 寫

本A及びTが二欄に書かれてゐるのに、本寫本は一欄、各欄三十四行、各行は平均五十字より五十二字詰。

四篇群分類「I—VI」迄を收錄。初めの四頁には目次。

最終の頁には後書（出博士の前出書四二頁の寫眞參照）

Ἐγράφη χειρὶ ἐῶ καλλιγράφου
εὐτυχῶς Ἀρέθᾳ διακόνῳ Πα-
τρεῖ νομισμάτων βυζαντί-
ων δέκα καὶ τριῶν μηνὶ νοεμ-
βρίῳ ἰδικτιῶνος ἰδ ἔτει κόσμου
ϛυδ βασιλείας Λέοντος τοῦ φι-
λοχ<ρίστο>υ υἱοῦ Βασιλείου ἀειμνήστου

「パトレア教區監督アレタスのために寫字生イォハネスによりて寫す、代ビュザンティオン金貨十三枚、世界紀元六四〇六年、よき思ひ出の皇帝の子愛基督者レオンの治下十一月十四日記」

とある。ビュザンティオン金貨一枚の重量は、一・一七六四匁。世界紀元六四〇六年は、西紀八九五年この後書によつて、同年アレタスの依頼を受けた寫字生イォハネスが此の書を寫したことは明白で

ある。そこで、アレタスのことになるが、彼はビュザンティオン帝國が生んだ極めて多彩な學者プォティオス（西紀八二〇—八九一頃）の秀れた弟子の一人で、恐らく西紀八六〇—五年頃、小アジアのパトレアで生れ、同九三九年頃その地で歿したものと思はれる。なほ、彼の命によりて轉寫した寫本には、西紀八八八年九月現オックスフォド所藏のエウクレィデス本 Bodleianus Dorvillianus 301（これには「ステプハネスの手によりて寫す」とある）があり、それから、間もない八九五年には、寫字生イォハネスをしてプラトン寫本Bを寫さしめたのであつた。その時、彼は、パトレア教區の監督であつたが、九〇七年には、カパドキアのカエサリア司教となつてゐる。その他、彼が古典書の蒐集家であつたことは、九一四年には、エウセビオスの「辯明」アレクサンドリアのクレメンス、九一七年にはアリスティデス、九三九年にはディオン・クリュソストムを寫さしめたことからも判る。一方、自ら加筆して傍註を書いてゐるものに、プラトン、ディオン・クリュソストム、パウサニアス、ルキアヌス、タティアノス、アテナゴラス、アレクサンドリアのクレメンス、エウセビオス等がある。そして、彼のエウセビオス寫本は最善本の一つである。プラトン寫本Bには同時代と認められる三人の手で校訂してあるが、その一人は明かにアレタスであつたと考へられてゐる。さて、アレタスが轉寫せしめた原本についてゞあるが、それは、恐らく首都コンスタンチノポリスに傳承してゐたプォティオス所藏本の、所謂「パトリアルク本」τοῦ πατριάρχου τὸ βιβλίον であると考へるべき理由がある。この「パトリアルク本」

と同系統のものが、つまり、先に述べた寫本A及びTの底本であると言はれてゐる。[8]

次に、アレタスの死後、彼の蒐集した文庫は、何時の間にか人手に渡つて、一三五五年頃には、他の五十八書目と共にパトモス島のヨハンネス・パラエルゴの有に歸し、それから同島の修道院文庫に移されたのであつた。それを、一八〇一年、英國の紳士クラアクによつてグレゴリオスの詩、プセレの作品、希臘音樂譜、キュリルの字彙等と共に、祕かに英國に持出された名高い話については前掲出隆博士の「プラトン僧坊脱出記」に詳しい。そして、のち一八〇九年には四百五十磅で正式にオックスフォド大學ボドレアン圖書館のものとなり、「クラアク寫本第三九號」と命名せられたのであつた。

巴里の Parisinus 1811, Parisinus 1001 は共に寫本Bを底本としてゐるもの。ベッカアはプラトン校訂本出版に當り、この寫本を自ら校合することなく、F. Graisford (1820) の校定版に據つたと言つてゐる。

プラトン寫本T　現伊太利ヴェネチア聖マルコ寺院所藏 Venetus append class. 4 cod. 1

この寫本の重要性は、シャンツ[9]により見出され、その詳細な研究は彼によつて發表されてゐる。そこで、寫本TはT_1 T_2 T_3 T_4と判然區別の出來る四人の筆よりなつてゐる。その中、最も重要なのは、寫字生T_1の筆寫した箇所にして、初めの犢皮紙第五紙面より第二百十二紙面に至る寫本中 altera familia

と呼ばれてゐる部分で、これは十一世紀または十二世紀に寫されたものである。寫本の大きさ 31.1×28.5mm T_1は二欄より成り、各欄は五十行、各行は三十五—四十字詰。脱落の箇所では三十四字詰平均。

四篇群分類「Ⅰ—Ⅷ12」（「國家」一—三章迄、つまり、389d ἄρα δεήσει のところで終つてゐる。すなはち、初め七つの四篇群全部と第Ⅷ四篇群中の二篇を含んでゐるわけである。そこで寫本Aに比すると、Aに缺けてゐる前半七つの四篇群を收錄してゐるが、たゞⅧ12の二篇のみが重復してゐる。故に、曾つて、ジョルダンは[10]、寫本AとTのこの重復の部分を詳細に比較した結果、この二つは本文（テキスト）も、傍註、符號、脱落に至る迄、完全に一致してゐるところから、寫本T_1はAが十二世紀頃、未だ完本の形を備へてゐる頃、それを底本として轉寫したものであらうといふ結論に達した。この學說はシャンツ、アリン、シャムブリィ等の支持を得てゐるが、オックスフォド版プラトン校定本出版者のバアネットによりて拒否され、最近では、プラトン傍註の研究出版をしたグリィンによつても否定されてゐる。現在一般に考へられてゐるところでは、寫本AとT_1は今日傳承されてゐない同一の古寫本（パトリアルタ本系）から轉寫されたものであらうといふのである。寫本T_1は、なほ全般に亙つて綿密な校合の要があり、また、傍註は何れの寫本のものよりも古く、夙にその價値が指摘せられてゐる。それから、寫字生T_2は第二一三—二五五紙面「國家」篇の殘部、T_3は第二五六—二六五紙面「ティマ

イオス」を含む。T_4はロォススJohanes Rhosusの手寫にして第一—四紙面、その中にプルウタルコス「ティマイオスに於ける靈魂の創造について」の抄、并びに、四篇群分類によるプラトン著作目錄が書かれてゐる。

そこで、T_1が寫本として極めて重要な理由は「Ⅶ」四篇群の存在にして、この部分は寫本Aにも缺けてゐるところである。そして、このところは、T_1のみがプラトン作品校定に於ける基本資料となつてゐる。その上、この寫本には「Ⅶ」4（「メネクセノス」同寫本第一九七紙面）の終りに頗る興味のある記述Τέλος τοῦ α' βιβλίου「第一卷終り」とあつて、この寫本の底本となつたものは、明かに上下二卷に分離してゐたことを立證してゐる。（この記入は寫本U、寫本Δ—Θ、寫本Laurentianus 59. 1等にもある）T_1は他のプラトン寫本、例へばParis. Coisl. 155（十四—十五世紀）Paris. 1808（十三世紀）Laurentianus 85.6（十三世紀）等に於ける初めの部分の母胎となつてゐる。

そこで、いま以上三つの基本寫本の內容を並べて見ると

寫本B「Ⅰ—Ⅵ」

寫本T_1「Ⅰ—Ⅵ」「Ⅶ」（一卷終）「Ⅷ 1 2」

寫本A「Ⅷ—Ⅸ」「定義、僞書」

となつて、T_1の重要さが一層明瞭になるであらう。

プラトン寫本O　現伊太利ヴァティカノ宮圖書館所藏 Vaticanus Gr. 1.

寫眞は P. Fr. de Cavaliert u. J. Lietzmann, Specimina codecum graecorum Vaticanorum, 1910 Pl. 9. 寫字生O_1の部分は西紀九、若しくは十世紀の手跡。　犢皮紙百九十一紙面、一欄四十行、一行は二十九字詰。大きさ 36.7×25.5mm.

寫本に關する限りでは、未整理の故に「底なしのヴァティカノ宮」と呼ばれてゐる法皇宮にあるが元來寫本Oは、ナポレオンによつて佛蘭西へ持出されたものゝ中にあつて、後、伊太利へ返され、現在ヴァティカノ宮にある。この寫本は、缺本の甚しいもので、內容は

四篇群分類「Ⅸ」2（法律）3 4「僞書」1—7（アクシオコホス）364e 迄。　この中O_1の筆寫は「法律」第一—五章 746b 以前にしてこれは古寫本から直接筆寫され、寫本中、この部分が基本資料として尊い。その餘の部分は、寫字生O_2によつて寫本Aよりの補寫、この寫本を母胎として、一四八二年に寫されたヴィエンナ本 Vind. 56 の內容から推すと、この不完全な缺本時代以前には、恐らく「Ⅶ—Ⅸ1」をも收錄してゐたことは明かである。本書は、最近ポストによつて研究[1]された結果、O_1はAよりも十九箇所正しい讀み方があり、A、O_1とパトリアルク本とは同一の善本より由來してゐると推定されてゐる。すなはち、行間の脫落、誤謬を同じくするのみならず、寫本Oには 162gc 以下所々に「パト

リアルク本による」といふ後書の校註がある。

プラトン寫本W　現墺國ヴィエンナ國立圖書館所藏 Vindobonensis 54 (Sup. Phil. gr. 7)

内容は六百三十七紙面。三人の寫字生の手になつた寫本で、早い部分が十一世紀に書かれた。四篇群分類「Ⅶ4」(メネクセノス)全部、その他は十二世紀の手寫「Ⅰ—Ⅵ1」「Ⅴ2」「Ⅵ2 3 4」「Ⅶ1 2 3」「Ⅵ1」「Ⅴ4 3 1」「Ⅳ4 3」「Ⅶ4」「Ⅷ1 2 3」と頗る不完全な形で收錄せられてゐる。

本書と他の寫本とを比較すると、寫本B、寫本Dに省略されてゐる部分を保存し、嘗つてシャンツによつてTと同系統のものより分れたものであらうと考へられたことがあるが、此の說は、後、訂正されてゐる。そして、この寫本の重要性は、夙にパスト Bast に認められ、プラアクの敎授クラアル Kraal に再認せられたのであつた。すなはち、エジプト出土のプラトン草紙文書(パピリ)研究の結果、その價値を著しく高めて來たためである。つまり、この寫本と次に述べる寫本Fは古代に於ける未校訂本の代表的なものであることが判り、アルビノスの用ゐてゐる定本(テキスト)は、寧ろ、寫本W系統に屬し、ヒルレルの考へるごとく寫本Rではないと言はれてゐる。

プラトン寫本C　現獨逸ティビンゲン大學圖書館所藏 Tubingensis gr. Mb 14.

内容、三百六十紙面。十一世紀の手寫。

四篇群分類「Ⅰ１２３」「Ⅲ—Ⅳ１２」「Ⅷ３」寫本Cは寫本Bとの近似が指摘されてゐる。

プラトン寫本D　現伊太利ヴェネチア聖マルコ寺院圖書館所藏 Venetus Marciani 185.

十三世紀の手寫。

四篇群分類「Ⅰ—Ⅳ」「Ⅷ１２」（國家）第十卷 612e 以下缺。「Ⅰ—Ⅳ」は寫本Bに近似し同じ系統に屬するが「Ⅷ１２」はBの缺帙部に當るものを含んでゐると考へられてゐる。

プラトン寫本P　現伊太利羅馬ヴァティカノ宮パラティノ圖書館所藏 Palatinus Vaticanus 173

内容、百六十三紙面。十若しくは十一世紀の手寫。

四篇群分類「Ⅰ２４」「Ⅳ１」「Ⅵ３４」「Ⅶ１」抄、傍註、定義を含む。寫本Wより寫したものか、その近似が指摘されてゐる。

プラトン寫本Y　現墺國ヴィエンナ國立圖書館所藏 Vindobonensis 21 (Phil. gr. 21)

内容、二百三十三紙面。十四世紀の手寫。

四篇群分類「Ⅰ—Ⅲ1」「Ⅵ3 4 Ⅶ1」「Ⅲ3」「Ⅷ3」「Ⅳ1 2」「僞書」

初めの部分は Parisinus 1808 (T+A) より、終りの部分は寫本Wよりの轉寫。

プラトン寫本S 現伊太利ヴェネチア聖マルコ寺院圖書館所藏 Venetus Marciani 189

内容、三百九十四紙面。十四世紀の手寫。

四篇群分類、初めの部分は寫本YとMよりのそのまゝの轉寫につゞき「Ⅶ2 3 4 Ⅷ1」「Ⅲ2 Ⅳ2 3」「Ⅴ1 2 3 4 Ⅵ1 2」

プラトン寫本F 現墺國ヴィエンナ國立圖書館所藏 Vindobonensis 55 sup. phil. gr. 39

内容、二百六十三紙面。十四世紀の手寫。

四篇群分類「Ⅵ3—Ⅸ1」を含む。たゞ「Ⅶ」に於いて「1 2 3 4」の順序になつてゐる。

早く、シュナイダア Schneider が「國家」校定本出版（一八三〇年）に際し、ストバイオス及びエウセビオスの用ゐた定本（テキスト）は未校定本Fなることを論じてゐるが、この學說はその後の研究によつて益々確立せられてゐる。

プラトン寫本M　現伊太利チエセナ圖書館所藏 Malatestianus. Plut. 28. cod. 4

內容、四百十五紙面。十四世紀の手寫。

四篇群分類「Ⅰ—Ⅶ」「僞書」「Ⅷ13 Ⅸ1」「Ⅷ2」

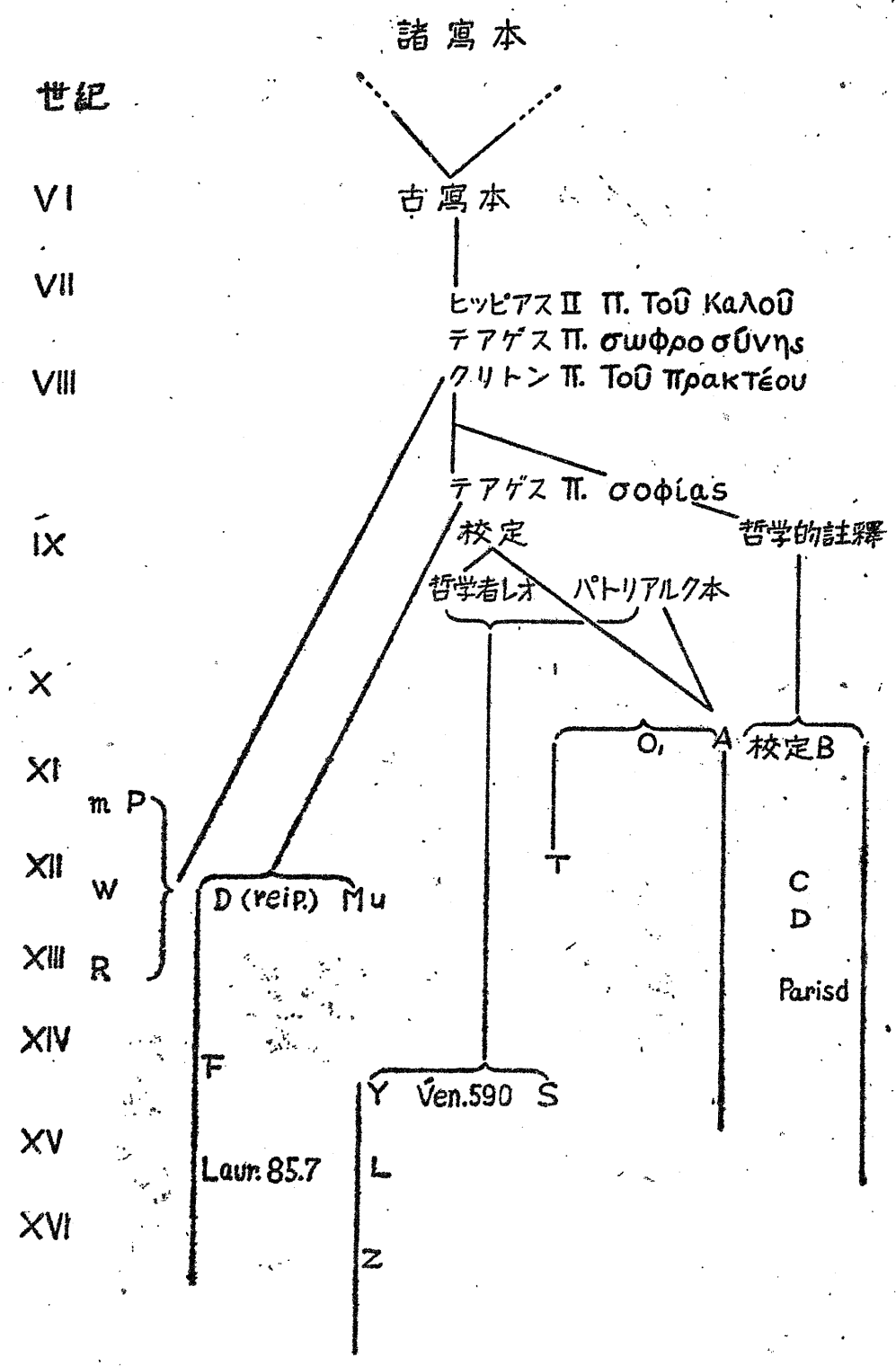
プラトン寫本U　現伊太利ロオマ、アンゲリカ圖書館所藏 Angelicanus C. 1, 4

十四世紀の手寫。

四篇群分類「Ⅰ—Ⅶ」「僞書」

寫本Bより轉寫したものと考へられてゐる。その他の寫本について言ふと、フィレンツェの**寫本L**は十四世紀。巴里の**寫本Z**は寫本Wに近く十六世紀のもの。ヴァティカノ宮の**寫本R**は二卷より成り、十四世紀の手寫。初めの部分は寫本Wより寫し、同じヴァティカノ宮の**寫本Δ**Θは十四、五世紀。ヴェネチアの**寫本E**は十五世紀の手寫。

そこで、これらの寫本の相互關係の問題になるが、曾つてオランダの古典學者コベイ Carolus Gabriel Cobet（一八一三—一八八九）が、一八六〇年、傳承のあらゆるプラトン寫本は唯二の最善本ABより派生したものであると主張した。そして、この學說は、シャンツによつて支持されたのであるが、彼は「Ⅶ」



四篇群を缺く寫本群中BCDを善本系とし、PRΔを不善本系の稍良本に屬するものとし、不良本系をTSOLgZYUEと區別したが、後、寫本Tを研究するに及んで、この學說に修正を要することを悟

つてゐる。

ところが、コペイの學說は、ジョルダン[12]が一八七四年發表した論文によつて挑戰せられ「總べての對話篇の讀み方は同一古寫本の權威に據ることを得ず」といふ結論を以つて排斥せられるに至つた。その上、ジョルダンは現存寫本をBによつて代表する(a)群、巴里本b（Paris. 1808）の(b)群、sによる(c)群の三系統を想定分類したが、この分類は、その後、個々の寫本の研究が進むに從つて、必らずしも、滿足すべからざることを暴露して來てゐる。

なほ、決定的なものとは言ひ難いが、これら寫本の相互關係の大要を知るため、イムミッシュが各の研究を綜合したところを、參考に表示すると前掲圖のやうである。[13]

(1) I. Bekker, Platon. 10v. 1816—1823.

(2) M. Wohlrab, Die Platonhandschriften und ihre gegen Beziehungen. Jahrb. f. Kl. Philol. Suppl. XV 1887, 641—728.

(3) L. A. Post, The Vatican Plato and its relations. 1934, 65ff.

(4) H. Alline, Histoire du Texte de Platon. 1915, 323.

(5) この一群の寫本を早く研究したアランは Paris. 1962 (Max. Tyr. Philosophumena). Heidelb. palat. 398. (Xenoph. Arr. Plut). Ven. Marc. 196 (Olympiod). Ven. 226 (Simplicius). Ven. 246 (Damascius). Ven. 258 (Alex. Aphr. Schol). Lauren. 80, 9 (Procl). Vat. 2197 (Max. Tyr. Philosophumena, Alcinous de Plat. dogmata). この寫本Aの九寫本は同一の筆跡と言つてゐる。T. W. Allen, a group of ninth century Greek Mss. Journ. philol. XXI,

1893, 47ff.

(6) H. Omont. Platonis codex Parisinus A. 1908, 1—3. H. Alline, Histoire du texte de Platon. 1915, 213f.

(7) O. Immisch. Philologische Studien zu Plato. 1903, 49f.

(8) K. Krumbacher, Gesch. der Byzantinischen Literatur. 1896, 217f. A. Tülicher Aretas. [P-W] II 1896, 675ff. I. Bidez, Aretas de Césaree Editeur et Scholiaste. Byzantin. IX 1934, 391ff.

パトモス島の聖ヨハネ修道院の文庫。同修道院は一〇八八年に創建、この修道院文庫の古い圖書目錄が傳承してゐるが、一二〇一年、一三五五年、一三八二年とあつて、この中最も古い目錄によると、既に三百三十卷の寫本が記錄されてゐる。一七八五年 Villoison が此の島を訪問した時、そこの修道僧たちの話として、二十年程以前に、僧侶たちが、二千から三千の本を燒却したと語つたとある。クラアクがこの島からプラトン寫本Bを持ち出したのち、此らの古典籍の眞價値を知つたのであるが、現在、猶この文庫には七百三十五卷の寫本が殘つてゐる。その中には、ディオドロスの外、ツウキュディデス、デモステネス、アイスキネス、ピンダロスの註釋書がある。

(9) M. Schanz, Ueber der Platoncodex der Markusbibliothek. 1877, 1ff.

(10) A. Jordan, Zu den Handschriften des Plato. III Hermes XIII 1878, 480f.

(11) L. A. Post, The Vatican Plato and its relations. 1934, 99f.

(12) A. Jordan, op. cit. 480ff.

(13) O. Immisch, Philologische Studien zu Plato II. 1903, 106.

五、プラトン草紙文書幷びにプラトン作品の諸譯本

そこで吾々は、以上述べた傳承寫本の外に十九世紀末以來、ナイル河畔の地より出土した幾つかのプラトン草紙文書、幷びに、これと同系統に屬すと思はれる底本を用ゐてなつたラテン譯、アラビア譯、及び、アルメニア譯本等を一瞥すべきである。

プラトン草紙文書（パピユリ）

伊太利ポムペイの郊外にあつて、西紀七九年十一月二十三日、同市と共に埋沒したヘルキュラニウムのプヒロデモス文庫から出た黑焦げの草紙文書の卷物中 Μύριαγξ τῶν φιλοσόφων があつて、これには古くから知られてゐる「アカデメィア學徒の表」[1]が書かれてゐるが、それはプラトン作品と直接の關係がない。すなはち、プラトン草紙文書の出土は現在迄のところ、埃及に限られてゐる。その斷片及び註釋書等を加へると、三十三文書ある。出土數の上からいふと、この地では他の何れの哲學者のものよりも、プラトンの著述が最も多く讀まれてゐた事實を立證してゐる。今、その表を掲げると

	作品名	草紙文書名	世紀	出土地
(1)	「ソクラテスの辯明」(四〇—一)	P. Berlin 13291	II—III	ソクノパイオス・ネソス
(2)	「プハイドン」(六七e—六九a、七九c—八一d、八二a—八四b)	P. Petr. I 5—8	前III	グロブ
(3)	同　(一〇二e—一〇三c)	P. Oxy. XV 1809	II	オキユシリンコス

(4) 同　(一〇九c—d)　P. Oxy. II 229　II　同
(5) 「政治家」(二八〇e—二八二e)　P. Oxy. X 1248　II　同
(6) 同　(三〇八e—三〇九c)　P. Osl. II 9　II　同
(7) 「饗宴」(二〇〇b—二三三d)　P. Oxy. V 843　II　同
(8) 「プハイドロス」(二六六b—d)　P. Columbia 492a　II　同
(9) 同　(二二七a—二三〇e)　P. Oxy. VII 1016　II—III　同
(10) 同　(二三八c—二五一b)　P. Oxy. VII 1017　II　同
(11) 同　(二四三a—二四四a)　P. Oxy. XVII 2102　II—III　同
(12) 「アルキビアデス」(一〇七c)　P. Harr. 12　II　同
(13) 「ラケヘス」(一八一b—一八二a)　P. Lond. II 187　II　—
(14) 同　(一八九d—一九二a)　P. Petr. II 50　前III　グロブ
(15) 同　(一九七a—一九八a)　P. Oxy. II 228　II　オキュシリンコス
(16) 「リユシス」(二〇八c—d)　P. Oxy. VI 881(裏)　III　同
(17) 「エウテュデモス」(三〇一e—三〇二c)　P. Oxy. VI 881　II—III　同
(18) 「プロタゴラス」(三三七—三五七)　P. Oxy. XIII 1624　III　同
(19) 「ゴルギアス」(四四七b—四六八a)　P. S. I. XI 1200　II　同
(20) 同　(五〇四b—五〇五a)　P. Rain. II 76—9　III　ファイユム
(21) 同　(五〇七b—五〇八e、五二二—六)　P. Oxy. III 454+P. S. I. II 119　II　オキュシリンコス
(22) 「國家」(三章四〇六a—b)　P. Oxy. III 455　III　同

史	事	第二十卷	第一號	(系)	王大
(23)	同 (四章四二二d)	P. Oxy. III 456	Ⅱ—Ⅲ	同	
(24)	同 (八章五四六b—五四七d)	P. Oxy. XV 1808	Ⅱ	同	
(25)	同 (十章六〇七—八)	P. Oxy. I 24	Ⅲ	同	
(26)	「テイヤイオス」(一九c—二〇a)	P.S. I. XI 1201	Ⅱ	同	
(27)	「法律」(七章七九七a)	P. Harr. 42	Ⅲ	同	
(28)	同 (八章八三二e—八三五e)	BKT II 53—54	Ⅱ—Ⅲ	—	
(29)	同 (九章八六二—三)	P. Oxy. I 23	Ⅲ	オキニシリンコス	
(30)	「德について」(三七六b—c)	Arch. V 379	Ⅱ	クカラ	
(31)	「テアイテトス」(一四二d—一五八a)註釋	P. Berlin 9782(BKT II)	Ⅱ	クレモボリス・マガナ	
(32)	「アイドロス」(二六五e—d)註釋	P. Berlin 8(BKT II)	Ⅱ	テアテエアエア	
(33)	「アヒンボス」(一六d—e)	P. Berlin 8(BKT II)	Ⅱ	同	

(引用書誌文書等略称)

BKT Berliner Klassiker Texte, herausgegeben von der Generalverwaltung der Kgl. Museum in Berlin. 1904ff.

P. Columbia C. W. Keyes, Papyrus fragments of extant Greek literature (Am. J. Philol). L 1929, 260ff.

P. Harr. J. E. Powell, The Rendel Harris. 1936.

P. Lond. ed. F. D. Kenyon, Greek papyri in the British Museum, Catalogue with texts. II 1898.

P. Osl. S. Eitrem et L. Amunsen, Papyri Oslenses. Fasc. II 1931.

P. Oxy. B. P. Grenfell and A. S. Hunt, The Oxyrhynchus Papyri. I—XVII 1898—1927.

P. Rain. Mittheilungen aus der Papyrussammlung Erzherzog Rainer. I—IV 1887ff.

P. Petr. J. P. Mahaffy, The Flinders Petrie Papyri. I—III 1891—1905.

P. S. I. Publicazioni della Societa Italiana per la Ricerca dei Papiri Greci e Latini in Egitto. Papiri Grici e Latini. I—XIII 1912ff.

この中、グロブ出土の西紀前三世紀に屬する「プハイドン」及び「ラケヘス」が一番古い。このパプュリの出土によつて、傳承のプラトン寫本に對する絶對的な從來の信頼が著しく動搖したのは事實である。すなはち、現存寫本の讀み方、例へば「プハイドン」六八a

καὶ γυναικῶν καὶ νέων を文法上の解釋を容易にするためペッリ草紙文書では

ἢ γυναικῶν ἢ παίδων ἕνεκα と轉訛してゐる。このやうに相違してゐる箇所が七十箇の多きに達してゐるが、三ケ所に亙つてイアンブリコホスとストバイオスに引用されてゐるプラトン定本(テキスト)の讀み方を支持し、現在傳承の寫本よりも正しいことが立證されてゐる。但し、この草紙文書の發見によつてプラトン哲學の解釋に與へた影響は皆無といつてよいが、それは、プラトンの死後百年を經過してゐない時代のものであること、從つて、發音、句讀點の研究上、傳承寫本よりもプラトン時代に用ゐられてゐたものに近いことが認められる。ウーゼネルは發見パプュリを輕視し、コルキッシュはその價値の再認識を主張してゐる。(2)

その他のものゝうちでは、オキュシリンコス出土のものが斷然多く、また重要なものがある。特に、

西紀二世紀頃の手寫と推定出來る「饗宴」（二〇〇b—二三三d）の後半を含むものは最も長く、且つ、定本（テキスト）校定上高い價値を認められてゐる。いま、傳承寫本中「饗宴」の代表的な寫本BTWと、本草紙文書 P. Oxy. 843 とを比較すると、P. Oxy. 843 は寫本Bと合致してTWに反するか、若しくはTWに合致してBに反する場合多く、Tのみに合致してBWに反する場合は極めて稀だと言はれてゐる。

次に、比較的善本系と言はれるものにオキュシリンコスから出土した美しい筆跡の「プハイドロス」P. Oxy. 1016 があるが、所々に寫本B、幷びに、Tよりも卓れた讀み方をしてゐることが指摘せられてゐる。

また、ベルリン國立美術館所藏のものには、著者未詳の二、三世紀に屬する「ティマイオス」註釋書がある。恐らく、口述の筆記を土臺として編したもので、內容はプラトン學者ガイオス（西紀二世紀後半）の影響を著しく受けた者の手になり、その初めに「子よ、おんみはテアイテトスに關する對話篇を持ち來りしや」他の者「吾々はその眞の初めを持ち來れり」とあつて、當時に於ける哲學教授の方法を知る上からも見逃し難い文書の一つである。そして、本書に用ゐられてゐるプラトン定本（テキスト）についていへば、十八箇所の新解讀のうち、五箇所は傳承の寫本よりも良く、何れかといふと、寫本BTに反してWに近いと考へられてゐる。

論考の性質上、個々のプラトン草紙文書について述べることは控へて、出土プラトン草紙文書に關し

て草紙文書界の權威グレンフェルが、嘗つて傾聽すべき次のやうな一般論を述べてゐるから、その概要をこゝに記して置かう。[3] すなはち、プラトン草紙文書の出現によつて

(1) 寫本Wは、プラトン定本校訂上BTと同樣に重要な基本資料であること、少くとも、從來よりは一層その價値が高められるに至つたこと。

(2) 後世轉寫せられた寫本があまりに無視されすぎてゐること。それらは、比較校訂に充分價値がある。例へば、不善本系に編入されてゐる寫本R (Vaticanus 1029) は、寫本WとOより十四世紀になつて轉寫したものであるが、今一應檢討する必要がある。

(3) 西紀前三世紀のアレクサンドリアではプラトンの作品は、その校定本を完成してゐなかつたと推定されること、西紀二世紀頃と雖も、これらの未校定本と、一般の校定本が相共に存在してゐたものと思はれる。

(古典草紙文書參考文獻)

K. Wessely, Aus der Welt der Papyri. 1914, 93—106.

W. Schubart, Einführung in die Papyruskunde. 1918, 92 f. u. 483.

C. H. Oldfather, The Greek literary texts from Greco-Roman Egypt. 1923, 52f.

G. Coppola, Appunti intorno di papiri di Platone. (Aegyptus) 1924, 213—230.

プラトン作品のラテン譯

ロオマ帝政初期に於ける、絢爛なラテン文學運動の歴史を考へる時、恐らく、それなくしては燦然たる光をはなつを得なかつたと思はれる程、これに最も大きな影響を與へてゐるアレクサンドリア文學のことを想起せずにはゐられない。勿論、希臘文化の主潮が、ロオマ社會に充分理解せられ、消化される迄には、ラテン精神の反動、ならびにそれとの長い摩擦時代を經過してゐる。

この間、プラトンの作品は、早くエンニウスによつて讀まれてゐることが判つてゐるが、一般の人々に迎へられるやうになつたのは、西紀前一世紀以前であらうとは思はれない。すなはち、當時の碩學ウアロが「プハイドン」を四篇群分類本の一として掲げてゐることについては既に述べた。そのうち、最も深くプラトンの作品を讀んだものはキケロであり、キケロがプラトンに親炙するやうになつたのはアンテオコホスを通してゞあることが認められてゐる。このことは、彼の著 De Legibus, De Finibus II, IV. Tusculanaus, De Fato, Topica, De Oratore, Patritiones Oratoriae に充分現はれてゐる。彼は、またプラトンの「プロタゴラス」と「ティマイオス」をラテン譯にしてゐるが、これはプラトン作品の最初のラテン譯とも言ふべく、しかもその斷片が傳承されてゐる。(4)

次に、アウルス・ゲリウス（西紀一三〇年頃生）が「プラトンのラテン譯辯論」Platonicos latina oratione (5) といふ言葉を用ゐてゐるが詳しいことは傳へられてゐない。更に、西紀三五〇年頃、一基督教徒カハル

キディウス Chalcidius といふものが、プラトンの「ティマイオス」五十三章c三迄をラテン譯にし、同時に「ティマイオス」の註釋を書いてゐるが、この譯文の寫本(西紀十一—十二世紀)は現在、ヴィエンナ Vindob. 278 及び フィレンツェ Ricard 173 に殘されてゐる。この譯本を研究した結果、スヴィタスキイ B. W. Switaski は、カハルキディウスは、西紀二世紀の折衷派のプラトン學者、恐らくヌメニオスより得た定本を用ひ、註釋はポシドニオスのものを援用したと主張してゐるが、その後、この說に反してポシドニオスは「ティマイオス註釋」を書かずといふ學說が出てゐる。(6)

それから、シドニウス Gaius Sollius Apollinaris Sidonius (西紀四三一—四八二或ひは四) が友人アポレウスの譯したプラトンの「プハイドン」(7)について語り、また、マメルツス・クラウディアヌス・エクディウス Mamertus Claudianus Ecdius が右のシドニウスに捧げた書 De Statu Animes の中には、到るところラテン譯の對話篇が引用せられてゐる。その外、九世紀にはマンノン Mannon の手によつて「國家」と「法律」がラテン譯されたと報じてゐるが、その原本は散佚して傳承してゐない。

總じて、ビュザンティオンに於けるプラトン研究は古典の校註に終止し、前述のプォティオス、アレタス時代と雖も訓詁學的以上には出でなかつた。然るに十一世紀になつてポルプヒリオス並びにプロクロス等の書に刺戟されたミカエル・プセロス Michael Psellos がプラトン研究に眞の新らしい烽火を點じた。彼を繼ぐものにイタリアのヨハンネス、エプェソスのミカエル、更にニカエアのエウスツラティ

ウス、イタリコス・ミカエル等出で、この烽火を諸國に傳へたのであつた。

恰も、その頃シチリア王國ウィリアム一世の宮廷に於いてアラビア幷びにギリシア原典よりのラテン譯を奬勵した結果、ビュザンティオシのプラトン研究の影響を享けた宰相ヘンリクス・アリスティップス Henricus Aristippus の手によつて、一一五六年以後、プラトンの「メノン」と「プハイドン」が希臘原典からラテン譯に移された。この譯書は次に述べるブルニの譯が出る迄、西歐のラテン語界にて廣く讀まれ、ペトラルカやサルタティ、ロオジア・ベイコン等は、アリスティップスのシチリア譯を通してプラトンを理解してゐたのであつた。幸ひ、兩譯書とも、現在稿本として、エルフルト、フィレンツェ、ヴェネチア、ライデン、オックスフォド等に保存せられてゐる。イムミッシュの研究によるとシチリア譯の底本は寫本W若しくはW系統のものであると斷定してゐる。

いま、もしリオナルド・ブルニ Lionardo Bruni（一三六九—一四四四）の言葉を藉りるならば「七世紀の間を經て希臘語の智識は復活したのである」といふ文藝復興期のフィレンツェに於いて、ブルニ自らのラテン譯が現はれる迄、この地では長い間、眞の希臘文化の研究は起らなかつた。彼がコシモ・デ・メディチの庇護の下にプラトン作品のラテン譯に着手し、一四二三年には「プハイドロス」を、それから一四三七年には「ゴルギアス」、それにつゞいて「ソクラテスの辯明」「クリトン」「プハイドン」（インノセント三世へ獻呈譯）「書簡」を譯出したのであつた。由來、ブルニの譯本は意譯と不備を以つて名を得てゐ

るが、彼の譯書によつて、プラトンの思想が西歐の地に普く知られるやうになつた功績は沒すべきではない。そして、この譯書の稿本はロンドンの大英美術館 Harlesianus 2570, 3551 et 4923 フィレンツェの Laurentianus 160 等に所藏せられてゐる。その上、當時法皇ニコラス五世の下ではクレテより來たゲォルギウス・ツラペヅンティウス Georgius Trapezuntius（一三九五—一四八四）が、「法律」と「パルメニデス」を譯出し、更に、その頃アントニオ・カサリニ Antonio Cassarini が「國家」をラテン譯にしてゐる。

その後、同じコシモ・デ・メディチの命によつて、プラトン作品の完譯が着手せられたのであつたが文藝復興期に於ける偉大な所產の一つとして、マルシリオ・フィチノ Marsilio Ficino（一四三三—一四九九）のラテン譯本が完成した。コシモの生前には十作品のみが譯出され、ロレンゾォ[9]の治下、一四七七年には、殘りの全部が譯了されたのである。そして、譯本は初め一四八二年より一四八四年の間に、フィレンツェより出版せられ、その後も屢〻複刻されてゐる。然るに、フィチノが翻譯の底本として用ゐた希臘語の原本は、不幸にして十六世紀の初期散逸して影を潛めて仕舞つた。しかも重要なことは、この原本は何れのプラトン寫本とも系統を異にし、寧ろ、プラトン草紙文書に近い折衷本なることは等しく認められるところである。

プラトン作品のアラビア譯本

アラビア語でプラトンは「アフラッウン」Aflatun 元來、イスラムの世界ではアリストテレスのものが廣く讀まれた程、プラトン哲學は理解されることがなかつた。初め希臘文化が、アラビアの世界に知られるやうになつたのは、スリアの基督教徒——特にネストリウス派及びモノフィジスト派の人々がアレクサンドリアの學統をダマスクスに傳へ、更にバグダッドのカリフ廳に移植してからのことで、勿論スリア譯を通してゞあるが、元來、プラトンの作品が、漸く讀まれるに至つたのは九世紀以後に屬する。すなはち、マムン王の治下（西紀八一三—三三）最初スリア人ヤヒア・イブン・アルビトリックが「ティマイオスの譯（この書は廣く讀まれ、その後再度改譯されてゐる）を完了し、同じバクダッドに居住してゐたネストリウス派の醫者フナイン・イブン・イシャック Hunain ibn Ishak（八〇九—八七三）が「國家」「法律」但し、この書はヤヒア・イブン・イシャックとの共譯にして譯本は傳承してゐない）「ティマイオス」（これは、また醫學「ティマイオス」とも稱ばれてゐるが、同じ譯者のガレノスの註釋書を指してゐるのかとも考へられる）を譯出し、これらの稿本は、現在コンスタンチノポリスに所藏されてゐるが、その外、フナイン・イブン・イシャックの「ソプヒステス」「プハイドン」及びイブン・アビ・ウサイビットの「ソクラテスの辯明」等がある。その上、アラビア譯の「プラトン傳」、プラトン作品の四篇群分類表が知られてゐるが、こゝにはプラトンの作品二十三書目名が掲げられてゐる。(10)

プラトン作品のアルメニア譯本

伊太利ヴェネチアの聖マルコ寺院所藏にかゝる、十二卷より成るアルメニア譯のプラトン作品がある。これには、この他、アルメニア譯プロクロスの「神學篇」を含んでゐる。アルメニア譯のプラトンの作品は、「エウテュプロン」「辯明（アポロギア）」「ティマイオス」「法律」「ミノス」の五對話篇である。そこで、直ちにアルメニア譯の底本となつた希臘原典寫本に關する系統の問題が起つて來るが、これに就いてコニイベア[11]が詳細な研究を發表してゐる。いま、彼の意見を要約すると、このアルメニア譯の底本は、傳承の何れのプラトン寫本にも仍つてゐるのではなく、恐らく、これらと全く系統を異にしてゐる古い折衷本にあることは明白である。强ひて求めるならば、從來、その重要性を顧られてゐない寫本Δ—Θ（シャンツのV—D）中、Δ寫本にある五對話篇「エウテュプロン」「辯明」「クリトン」「プハイドン」「ゴルギアス」のみが多少似通つてゐる。すなはち、Δとアルメニア譯とを比べると、「辯明」二十一章cには、全く同樣な脫落、幷びに特徵ある判讀に於て一致してゐる。但し、寫本Λの原文とアルメニア譯文とを嚴密に比較すると、アルメニア譯本の底本となつた希臘原典の方が、Δよりも適かに善本であるらしく思はれる。そして、この底本は西紀五乃至八世紀頃迄遡り得ると考へられる。なほ、譯本の製作事情年代に就いて言へば、ビュザンティオンの學統を繼いだミカエル・プセロスの影響を受けたメソポタミア

公グリゴオル・マギストロス Grigor Magistros（西紀一〇五八歿）の手によつて、凡そ西紀一〇三〇年頃譯出されたものである。之に對し、イムミッシュはアルメニア譯の底本が、寫本BTWYに似通つてゐることを指摘してゐる。

(1) S. Meckler, Academicorum Philosophorum index Herculanensis. 1902.

(2) E. Korkisch, Dissert. Philol. Vindob. IX 1919, 1 ff.

(3) B. P. Grenfell, The value of papyri for textual criticism. J. H. S. 39. 1919, 27ff.

(4) Jerom. Epp. 145, Cicero, De finibus II 5, Academ.

(5) Aul. Gell. XIII.

(6) W. Kroll, Chalcidius [P-W] III 1899, 2042f. E. Steinhermer, Untersuchungen über die Quellen des Chalcidius. 1912, 43.

(7) Sidon. Epp. II 9, Carm. 178.

(8) C. H. Haskins and D. P. Lockwood, The Sicilian translators of the twelfth century and the first Latin version of Ptolemy's Almagest. Harvard St. Class. Philol. XX. 1910. 75ff.
O. Immisch, Philologische Studien zu Plato. 1903, 33ff. 中世紀のプラトン研究に關して、最近手頃な研究書が出版された。
R. Klibansky, The continuity of the Platonic tradition during the Middle Ages. 1940, 66pp. 同時に V. Kordeuter よつてアリシッポスのラテン譯、プラトンの「メノン」が初めて出版されたことが告げられてゐる。

(9) 前述したヤアヌス・ラスカリスの東方への寫本探訪の旅行は、このロレンゾオの庇護の下に行はれ、その結果、寫本Aが伊

太利へもたらされたのは一四九二年であつた。（前章寫本Aの項參照）

(10) M. S. Schneider, Die arabische Uebersetzungen aus dem griechischen. Zentb. f. Bibl. XII 1893, 16ff.
Fr. Ueberweg-B. Geyer, Die Patritische und Scholastische Philosophie, 1928, 715ff.

(11) F. C. Conybeare, On the ancient Armenian version of Plato. Am. J. Philol. XII 1891, 193ff. 399 ff., XIII 1893, 335ff. XV 1894, 31ff., XVI 1895, 300 ff. cf. Cl. Rev. 1891, 193ff.
O. Immisch, Philologische Studien zu Plato. 1903, 27ff. 近東諸國の各國圖書館に散在するスリア、アルメニア、アラビア譯本のプラトン作品並びに註釋本の組織的な蒐集及び研究がなさるべく、その完成によつて、特に希臘風文化時代に於ける失はれたプラトン研究への發足が豫定されてゐる。

六、結

そこで、以上述べて來たところを要約すると、プラトン作品の寫本は、恐らく、初めアカデメィア學園に於いて至寶として代々保管せられたものと、一方、早くから未校定本のまゝ地方に流布せられたものとあつたが、前者は、その間、幾多の變遷を經、今日傳承してゐる比較的善本系に屬するものによつて代表されてゐると考へられ、後者は、アレクサンドリアに渡つて、エジプト出土のプラトン草紙文書に、その餘影を留めてゐるといへる。そして、古典作家の引用したものでは、イアンブリコォス、エウセビオス、アレクサンドリアのクレメンス、アテナイオス、ストバイオス等の用ゐた寫本と、アルメニ

ア譯、幷びに、ある種のラテン譯の底本は、凡そ、系統が近似してゐる。而も、今日傳承のプラトン寫本の中には、嘗つて、アレクサンドリアの文典學者たちの手によつて發明された、校定用の諸種の記號、卷章の區分、行數の記入、傍註の書入等があるところから、後年ビュザンティオン時代の校定期を經て、略ぼ現在の形態を具へる迄には、多少の程度に於いてアレクサンドリア本が參照せられてゐると見なければならぬ。

さて、こゝで一つの問題が殘されてゐる。すなはち、先に引用した史料デオゲネス・ラエルティオスの報告では、プラトンの最後の作は「ノモイ」であり、遺作「エピノミス」はオプスのプヒリッポスが編したとあつた。そして、傳承寫本の四篇群分類の終では、明かにその通りになつてゐる。すると、四篇群分類の順序は、プラトンの著作年代順であるかといふと、事實はそうでない。要するに、こゝに出發點があつて、眞のプラトン哲學の體系的研究には、まづプラトン作品の眞僞、並びに作品個々の書かれた順序、及びその年代決定の問題に當面しなければならぬ。畢竟、プラトン哲學の發展とその創作的活動は不可分の關係にあるからである。しかし、最初斷つたごとく、このやうな研究は本稿の課題とは別箇の分野に屬してゐる。今は、たゞ、これについて、古くテネマン、シュライエルマヒェル及びヘルマン等が主張したプラトンの作品を辯證法的對話篇と詩的對話篇とに區別し、前者を哲學者の若き日の作とする見方によつてプラトン哲學の體系を樹立しようとするやうな方法に反し、一方、より科學的な

文體統計學的方法によつて、これらの難問題を解かうとするキャムベル以來のプラトン作品の文體統計學的研究[1]のあることを報ずるのみに止めて置かう。そしてこの方法によつて、最も大きな功績を遺してゐるコンスタンティン・リッタアが最後に達したプラトン眞作品の創作年代順による表[2]を掲げてこの稿を了りたい。

Ⅰ　ヒッピアス第二　ラケヘス　プロタゴラス　カハルミデス

Ⅱ　エウテュプロン　辯明　クリトン　ゴルギアス

Ⅲ　ヒッピアス第一　エウテュデモス　クラテュロス　メノン　メネクセノス

Ⅳ　リュシス　饗宴　プハイドン

Ⅴ　國家　プハイドロス　テアイテトス　パルメニデス

Ⅵ　ソプヒステス　政治家　ティマイオス　プヒレボス　法律

書簡第三と第八及第七(?)

(1)　文體統計學の問題について概說的な論考が邦譯されてゐる。河野與一譯ルトスワフスキ著「プラトン對話篇年代決定の新方法」昭和四年岩波書店全五七頁。この問題に關するルトワフスキの主著その他の文獻は本書參照。本譯書のあることについては長友宮崎幸三氏の示敎に負ふ。

(2)　C. Ritter, Die Kerngedanken der Platonischen Philosophie. 1931, 76.